令和元年度

日本文化特別演習 報告書

第9号

北海学園大学人文学部

令和元年度

日本文化特別演習 報告書

第9号

千本釈迦堂前にて

北海学園大学人文学部

第1日 2月24日
［移動と団体研修］

新千歳空港にて
（新型コロナウイルス対策で全員マスク着用）

百舌鳥古墳群巡検（ガイドはボランティアの小川正夫氏）

履中天皇陵古墳

大仙公園

仁徳天皇陵古墳

第2日 2月25日
［団体研修］

村中亮夫先生の歩いて学ぶ人文学（京都市街地巡検）

上京区役所前（巡検スタート）

千本ゑんま堂

旧西陣小学校前

北野天満宮
（マスクを取って記念撮影）

千本釈迦堂

千本釈迦堂

第3～5日

2月26日～2月28日

［自主研修(グループ、個人)］

貴船神社のおみくじ結果

近江牛御膳

近江八幡市のマンホール

大黒山金剛寺にて

月錦保存会

大覚寺写経体験

嵐山キモノフォレスト

鹿苑寺金閣

二条城庭園

神泉苑

仁和寺

龍安寺の枯山水

京都𠀋びす神社の鳥居

大覚寺

平等院鳳凰堂

五重の塔と桜

北野天満宮ご神木

龍安寺の梅

伏見稲荷大社

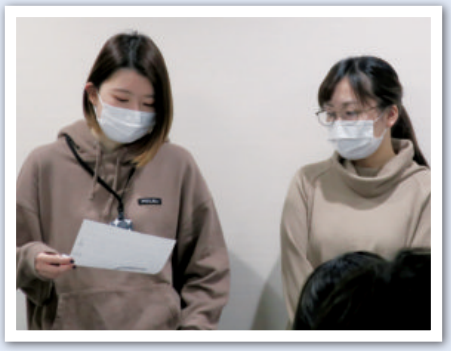
伏見稲荷　鳥居と猫

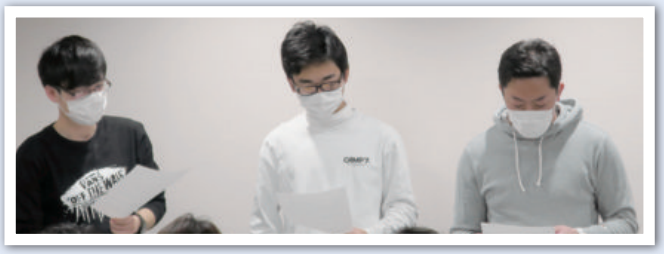
伏見稲荷大社千本鳥居にて

伏見稲荷千本鳥居

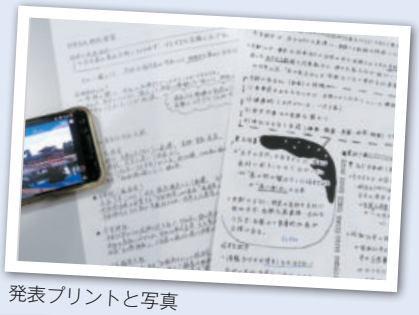
第6日 2月29日
[研修成果発表会]

B班


A班


C班

D班


発表プリントと写真

E班

F班

御朱印

発表会のようす

目　次

令和元年度　日本文化特別演習　報告　　引率教員　寺田　吉孝　　関本　真乃

食べて感じる西の食文化―京都・大阪・兵庫―　以頭　果歩 …… 1
関西の「らしさ」を探る旅　図司　彩音 …… 3
書道史に学ぶ　米津　元気 …… 5
歴史と文化のつながり　渡辺　康太 …… 7
千年の都京都の寺社めぐり　高橋久美子 …… 9
研修旅行レポート―京都を訪れて感じたこと―　原　　潤哉 …… 11
京都を歩く、京都に学ぶ―鴨川をキーワードに―　橋本　直樹 …… 13
新選組の足跡を辿る　多田有梨花 …… 15
空海を通じて日本の仏教文化を学ぶ　伊藤　あゆ …… 17
森見登美彦の描いた世界を巡る　甲斐　耕介 …… 19
京都研修レポート　栃本　賢志 …… 21
寺社仏閣をめぐる　山根名那美 …… 23
寺社を巡る　三浦　真嗣 …… 25
御朱印帳と共に都七福神めぐりを行ってみて　宮田　優香 …… 27
京都の抹茶とカフェ　八巻　　栞 …… 29
今を美しく生きる　後藤久美子 …… 31
京都の中で感じる「古」に触れる　能戸　麻紀 …… 33
日本文化特別演習に参加して　中村ちひろ …… 35
神様と歩く京都　門間　未来 …… 37

令和元年度 日本文化特別演習　報告

引率教員　　寺田　吉孝　　関本　真乃

令和元年度の日本文化特別演習では10月から1月にかけて3回の事前ガイダンスを実施しました。その後、令和2年2月24日（月）から2月29日（土）の5泊6日の日程で関西（特に京都）に於いて実地研修（団体、グループ、個人）とその研修成果の発表を行いました。

新型コロナウイルスの影響が顕著になる直前の出発だったので、大学によって研修の実施が認められました。しかし、空港や博物館内等での感染を防止するために、各個人が手洗い、マスク着用などによって細心の注意を払った6日間でした。

履修者（参加者）数は、昨年度よりもやや少なく19名（1部8名、2部11名）でした。事前レポートに書かれた内容をもとに、興味、研修テーマなどを考慮し、6つのグループに分けられました。

Ａ班　以頭果歩、図司彩音
Ｂ班　米津元気、伊藤あゆ、甲斐耕介、栃本賢志
Ｃ班　渡辺康太、原潤哉、三浦真嗣
Ｄ班　橋本直樹、多田有梨花、宮田優香、八巻栞
Ｅ班　高橋久美子、後藤久美子、山根名那美
Ｆ班　能戸麻紀、中村ちひろ、門間未来

今年度の研修日程は下記のとおりです。

１日目　移動（新千歳空港→関西空港→〈貸し切りバスにて〉堺市を経由して京都）
　　団体研修「百舌鳥古墳群巡検、堺市博物館訪問」
２日目　団体研修（歩いて学ぶ人文学）「京都市街地巡検」
３日目　自主研修（グループ研修・個人研修）
４日目　自主研修（グループ研修・個人研修）
５日目　自主研修（グループ研修・個人研修）
６日目　プレゼンテーション（研修成果発表）
　　移動（〈貸し切りバスにて〉伊丹空港→新千歳空港）

最終日のプレゼンテーションでは、歩きながら五感（見る・聞く・かぐ・味わう・触れる）を使って修得した研修成果をグループごとに披露しました。積極的な質疑応答を反映させ、発表内容をリファインさせたレポートに各自がまとめあげています。ご高覧ください。

2日目の団体研修で講師をお引き受けいただいた村中亮夫立命館大学准教授（昨年3月まで本学人文学部准教授）の、綿密な資料準備と明快な説明により、「歩いて学ぶ人文学」を体得させていただきました。また、（株）ブルーツーリズム北海道の浦口宏之様には今回の研修旅行の各種手配をいただきました。この場を借りて、お二人に感謝申し上げます。

食べて感じる西の食文化
―京都・大阪・兵庫―

1部日本文化学科　2年　2718108　以頭　果歩

今回私は、「食」をテーマに自主研修を行った。京都・大阪・兵庫を一日ずつ周り、それぞれの地域で様々な料理を食べた。食べ歩き方式で多くのものを食べたため、旅程に沿って西の食文化について触れていきたいと思う。

2月25日（火）

午前の団体研修が終わり自由研修となった午後、私は嵐山へ向かった。ここで私が食べたのは「ゆばチーズ」であった。京都の食を代表とする湯葉をチーズとともに揚げたものである。地域を代表する名産品を食べやすく、また手軽に食べられる形になっており、観光地らしい一品であった。

2月26日（水）

自主研修1日目であるこの日は、大阪を訪れた。

大阪といえばたこ焼きということで、昼食として道頓堀付近のたこ焼き店を食べ歩きした。やはり観光地ということもありどの店舗も混雑していたが、その中でも「くくる」「十八番」「わなか」の 3 店舗でそれぞれたこ焼きをいただいた。それぞれの店舗によって特徴が異なり、「くくる」は外がカリッと、中がとろとろのたこ焼き、「十八番」は天かすが入っておりサクサクなたこ焼き、「わなか」は紅ショウガの風味が強めのたこ焼き、という印象があった（写真は「わなか」のもの）。「大阪のたこ焼き」と一言でくくってしまうにはもったいないほどぞれぞれの店舗で違う特徴が見られた。また北海道のたこ焼きに比べ一個一個のサイズが小さく感じた。観光地ということもあって、様々な店舗と食べ比べてもらうためなのだろうかと考えた。

大阪を「食」に視点を当てて歩き感じたことは、観光地にある飲食店の多さである。たこ焼き屋然り、串カツ、お好み焼きなど、観光地にはそれらの店しか見当たらないような印象があり、「大阪の観光＝食」ともとれると感じた。

2月27日（木）

自主研修2日目、この日は京都を一日かけて回った。

まず最初に食べたものは、みたらし団子である。私の団子の印象はスーパーやコンビニで売られているような冷えた団子のイメージであった。しかし、実際に京都で食べたみたらし団子は、みたらしも団子も温かく、一つ一つがやや小ぶりのものであった。個人的な意見ではあるが、みたらしも団子も温かい方がおいしく感じた。

次に食べたのはお好み焼きとモダン焼きである。お好み焼きといえば大阪、という印象

が強いが、実際に京都を歩いているとお好み焼きの専門店が多くあることに気づく。あえて京都で食べるお好み焼きに興味を持ったのである。また、モダン焼きを私は知らず、関西発祥と言うことで興味があり注文した。どちらも北海道よりもキャベツの印象が強かった。

2 月 28 日（金）

自主研修最終日であるこの日は、まず「京の食文化ミュージアム　食あじわい館」を訪れ、京都の食文化についての学びを深めた。今回の研修では食べ歩きをメインに行っていたため日常的なおかずである「おばんざい」や「京料理」に直接触れる機会がなかった。実際に体験することができなかった食文化もここで学ぶことができた。

その後私が向かったのは神戸である。神戸南京町には中華街がある。この日の目的は中華街での食べ歩きである。

ここで食べたのは「老祥記」の豚饅、「小籠湯包」の小籠包、「皇蘭」の角煮バーガーである。「老祥記」は豚饅発祥の店として知られ、訪れたのがお昼時ということもあり絶えず列を作っていた。どの店もできたてを提供しており、熱々の肉汁があふれ出るものばかりであった。

まとめ

今回の関西研修で「食」に視点を当て様々な地域を回った。関西とはいえどもそれぞれの地域で違った「食」文化を感じた。

京都は京都でとれる食材そのものを生かした料理や、受け継がれてきた文化による日本らしさを食文化とし、観光の一つとしている印象を持った。

それに対し大阪は、「グルメ」を観光の最大の推しにしているように感じた。先ほども述べたように観光地に同じ料理を提供する店が何軒もあることや、観光地の飲食店の多さからそのように感じた。

また、それぞれの地域の「食」の違いはお土産店でも見ることができた。

京都は抹茶菓子や八つ橋など和菓子が多い印象であったが、その他にも抹茶を使用した洋菓子や漬物など、そのものの味が引き出されている土産物が多いように感じた。

それに対し大阪のお土産はたこ焼き風味のお菓子や串カツ風味のお菓子など、一つの料理として完成しているものを利用した土産物が多いように感じた。

北海道にいては感じられなかった「食」の地域差を感じることができ、とても有意義な研修となった。

関西の「らしさ」を探る旅

1部日本文化学科　2年　2718160　図司　彩音

Ⅰ.はじめに

今回の研修旅行に参加するにあたり、私は、「関西の食文化に実際に触れ、食文化のその土地『らしさ』を知る」というテーマを設けた。このテーマをもとに事前レポートを作成し、また、情報を収集して研修に臨んだ。しかし、研修旅行で実際に各地を訪ね、計画をもとに各地を巡っていると、各地の食についてだけでなく、その土地独自の文化を肌で感じ取ることができたため、その土地自体の「らしさ」について考えたいと感じた。そのため本レポートでは、私が各土地で感じたその土地独自の文化を「らしさ」とし、「関西の『らしさ』を探る旅」というテーマのもと、当初の食文化についても触れながら、報告する。私は、この5泊6日の研修旅行で、京都・大阪・神戸の3都市を訪ねた。本レポートでは各都市を実際に訪れて特に印象に残っていることや思い出に残っていること、学んだことを、それぞれの都市ごとにまとめ、報告レポートとする。

Ⅱ.大阪「らしさ」とは

研修旅行3日目の2月26日に大阪を訪れた。大阪には、たこ焼きやお好み焼き、串カツなど、いわゆる「大阪名物」がたくさんある。それらは現在私が生活している北海道のように、大阪でなくても食べることができる。そうであるのにもかかわらず、「名物」としてその土地に存在しているのはなぜなのかという疑問を持った。実際に大阪で名物を食べ歩き、お店を巡ったことで気づいたことがある。それは、「名物と呼ばれるものは、その土地で複数のお店が競争している」ということである。たこ焼きを例に挙げる。北海道でたこ焼き屋というと、銀だこが主となっているように感じる。言い換えると、他に競合する店がないのである。それに対し大阪は、たこ焼き屋というと、「わなか」、「くくる」、「たこ焼き十八番」など、複数の店の名前が挙げられるのである。それに加え、これらの店が一つの商店街内のような、近い距離に店を構えているのである。このような状況にあることによって、他店舗との競争により、互いの高め合いが発生し、より発展しているのではないかと感じた。それが、大阪名物としてのブランドを保っている理由であるとともに、大阪「らしさ」を演出しているのではないかと考える。

写真1

Ⅲ.京都「らしさ」とは

研修旅行2日目の2月25日の全体研修後と4日目の2月27日は、今回の研修旅行の拠点であった京都を巡った。4日目の研修では実際に着物を着て京都の名所を巡った。実際に京都の各所を巡って、私たち人間が京都「らしさ」を感じる理由が、二つあると考えた。一つ目は、京都に行くだけで昔ながらの街並みを見ることが出来るという点である。京都

には、言わずもがな日本の昔ながらの街並みが多く存在する。右の写真に挙げたような、瓦の屋根、木がメインで用いられた壁。そして、今回私が実際にそうであったように、観光客が着物を着てあたりを散策している。タイムスリップしたかのような景色が広がっていた。この視界いっぱいに広がる景色こそが、京都「らしさ」を演出していると感じた。

二つ目は、その土地の方々の心遣いである。私は今回、京都でお土産をたくさん購入した。その際、レジで対応してくださった店員の方や、着物の着付けを担当してくださった方など、客に対する態度にとても心がこもっているように感じた。これも京都「らしさ」といえると感じた。

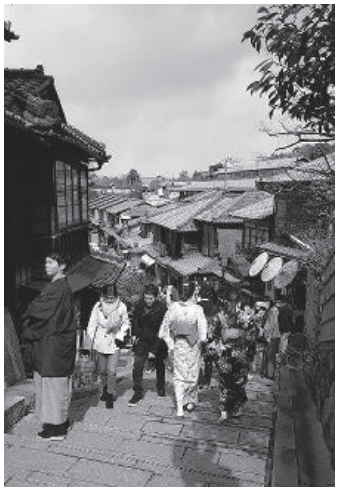


写真２

Ⅳ. 神戸の中華街「らしさ」とは

研修旅行５日目の２月 28 日は神戸を訪ねた。神戸を訪ねた一番の目的は、南京町の中華街を訪れることであった。私は、神戸の中華街を訪ねるにあたり、「そもそも神戸に中華街があるのはなぜか」という疑問を持った。南京町商店街振興組合のホームページによると、そもそもは外国人居留地に住むことが出来なかった清国の人たちが、その外国人居留地の西側に位置する現在の「南京町」に居を構え始めたことが、現在の南京町の発展のきっかけであったという。その歴史を知識として頭に入れた上で現地を訪れると、神戸の南京町はただおいしい中華料理がある商店街というだけではなく、建物などから歴史を感じながら中華料理を食べることができる町であるということを実感した。これは、神戸の南京町、いわゆる中華街「らしさ」といえると思う。

Ⅴ. 結びに

５泊６日の関西での研修旅行を終えて、「過去のものを残すという重要性」を肌で感じた。現代を生きる人間に合わせて形を変え、文化を順応させることももちろん必要であるとは思う。しかし、それ以上に現代を生きる私たちの方が、昔からある文化に順応し、それを未来へ伝えることが大切なのではないかと思う。

また、今回研修旅行に参加するにあたり、情報収集のために様々な観光ガイドブックや、インターネットのサイトを見たが、実際に現地を訪ねて自分で体感することで、文章や画像からだけでは感じ取ることができない空気を感じ取ることができた。今後も、自分で計画して、積極的に旅行をしていきたいと思う。

〈参考文献〉

・南京町商店街振興組合ホームページ／南京町の歴史（2020 年３月６日アクセス）
https://www.nankinmachi.or.jp/about/history/

〈写真〉

1. 大阪で食べたたこ焼きの中で個人的に一番お気に入りである「わなか」のたこ焼き
2. 京都「らしさ」を感じることができる二寧坂の街並み

書道史に学ぶ

１部日本文化学科　２年　2718222　米津　元気

はじめに

私は５泊６日の京都研修で多くの寺院を巡った。京都にあるたくさんの寺社仏閣の中から三筆に関係のある所を見て回った。今回の研修の目的は三筆にまつわる寺社仏閣を巡りどのようにしてすばらしい書が生まれたのかを理解することである。三筆とは日本の書道史の中で最も優れた３人のことで、平安時代の空海・嵯峨天皇・橘逸勢のことを指す。京都には空海と嵯峨天皇にまつわる寺社仏閣があるので、そこを中心に巡った。

京都鉄道博物館

まず、私は鉄道が大好きで７日間で 100 時間も電車に乗っていられるほど鉄道が大好きである。しかし、電車に乗って眠ることが好きなだけであって鉄道の歴史や仕組みなどについてはあまり詳しくなかった。そのような状況だったので、鉄道博物館では鉄道の歴史や仕組みなどを学ぶことができて大変満足できた。鉄道博物館は見て回る一般的な博物館と違い、実際に体験して学ぶことができる博物館である。特に線路点検に使われていた軌道自転車を実際に乗ったことがとても楽しかった。線路内をペダルで漕いで枕木の鳴る音を身体で感じることができて貴重な体験となった。ほかにも操縦席に座っての操縦体験をすることができたり、電車を真下から見たりすることができたり、鉄道博物館でしかできない体験ができて時間が足りないくらいであった。

伏見区

伏見区では伏見稲荷大社に行って有名な千本鳥居を見ることができた。写真では感じることができない迫力や雰囲気を体感できてよかった。山頂まで登ろうとも考えたが、小雨が降っていたことと歩きすぎで山頂まで登りきる体力と時間がなかったために断念した。

伏見稲荷大社から電車で 20 分ほどの場所にある寺田屋旅館にも行ってきた。寺田屋は薩摩藩の集合場所ともいわれる場所で坂本龍馬が襲撃された寺田屋事件の舞台でもある。宿に入ると柱に銃痕や刀の切り傷が残っていて事件の生々しさが未だに残っていた。訪れた際にお客さんが私だけだったので、襲撃の際に女将のお竜さんが入っていた風呂釜の場所から、二階に上がって龍馬に危機を伝えることを再現してみることができた。そうすることで緊張感を感じることができ、龍馬や薩摩藩士がどのような気持ちであったかを考えられた。しかし、ホテルに戻ってから寺田屋について調べてみると、寺田屋は鳥羽伏見の戦いで焼失していて再建されたものであり、銃痕や刀の傷が偽物であることを知ったときは複雑な気持ちになった。

大覚寺（旧嵯峨御所）

大覚寺は弘法大使空海を宗祖と仰ぐ真言宗大覚寺派の本山で嵯峨天皇の住まいで嵯峨御所ともよばれた。般若心経写経の根本道場であり、優しい難易度のものから本格的なものまである写経体験をすることができる。大覚寺は山奥にひっそりとあるお寺で自然を全身で感じることができる。そのため動物の鳴き声や風の音がよく聞こえるので書や文学作品を作るには最適な環境であるとわかった。大覚寺がほかのお寺と大きく異なるのは、寺に近接している大沢池である。大沢池は周囲約 1km の日本最古の人工的なとても巨大な池である。大沢池のほとりに位置している本堂から見ると、視界一面に池が広がっており本堂が池に映ってとてもすばらしい眺めであった。さらに廊下の床が鶯（うぐいす）張りになっていた。鶯張りは人が床の板の上を歩くことによりきしむ音が鳴るように作られた仕組みである。鶯張りは二条城と知恩院が有名であるが、その二つのお寺は町の中心部にあるので車の走る音などが気になることがある。しかし、大覚寺は自然に囲まれ静かなので床板がきしむ音が際立っていた。さらに、きしむ音も不快な音ではなく心地の良い音であった。空海と嵯峨天皇が書を書いていた場所で写経体験もできた。写経体験では文字を書いたり弘法大使の絵をかいたりをする。実際に写経をしてみて心の落ち着く環境であったことが身をもってわかり、素晴らしい作品ができたことに納得ができた。

↑大覚寺写経体験

最後に

今回の演習は高校の時に訪れた修学旅行と違い、時間に余裕があったのでたくさんの場所にも訪れることができた。最初は長いと感じていた 5 泊 6 日も終わってみればあっという間であった。お寺の縁側に座る時間などもあったので流れる時間を感じることができ、そこで起きた歴史なども考えることができた。三筆にゆかりのある場所に足を運んだが、あまり書道作品を見ることができなかったのが残念ではあったが、三筆が見た風景を自分も見ることができてとても満足できた。この演習に参加するかどうか金銭面などで悩んだが参加してとてもよかったと思えた。この演習に参加しようか悩んでいる方は参加することをおすすめする。

歴史と文化のつながり

1部日本文化学科　2年　2718224　渡辺　康太

私は、今回の日本文化特別演習において寺社巡りをテーマにして散策した。演習終了後、京都府にある事業所数を調査したところ、平成26年の時点で正式登録されている寺社の数は、神道系が378件、仏教系が2,446件の合計2,824件ある。ちなみに北海道の寺社は総数2,930件あるそうで、京都よりも多いことが分かった。いずれにせよ、回った寺社について全部書くことは不可能なので、自由研修で回った何件かについて書いていく。

1日目は豊国神社、方広寺、銀閣、貴船神社を散策した。豊国神社は豊臣秀吉を祀っている神社である。シンプルな境内であるものの、本堂は豪華な造りとなっていた。境内にある宝物館には秀吉ゆかりの展示物があり、鎧・巻き物・刀だけでなく、豊国祭礼図屏風・秀吉の歯など珍しい展示物が並んでおり他の神社にはない魅力があった。次に、隣接している方広寺に訪れた。方広寺には大阪冬の陣・夏の陣のきっかけになった「君臣豊楽」「国家安康」の鐘があり、初めて見ることが出来て感激した。ただ、鐘以外に拝観できる箇所は無く残念だった。次に訪れたのは銀閣。天気が少し曇っていたが、それが銀閣の「静けさ」が上手く引き出されているようでとても魅力的だった。銀閣について調べていく中で、義政は家族にさえ銀閣の存在を知らせていないことや義政が政治から身を引こうとしていたことから、「一人になる時間を必要としていた」と考察した。その考察を基に改めて銀閣を見ると、周りの木々と銀閣がほぼ同じ高さになっており、今で言う秘密基地のような印象をもった。人文学的・歴史的に文化を見るという今回のテーマに合った散策になった。この日の最後に訪れた貴船神社は、6日間の中で最もホテルから遠い位置にあり、また山奥に位置しているため参拝するには労力がかかるなと感じた。他の訪問地に比べ歴史的背景は少ないものの、秋篠宮さまを含めた皇族の方々も参拝しているそうなので、今後また知見を深められたらと思う。

2 日目は金閣、嵐山（竹林の小径、天龍寺）、晴明神社を散策した。金閣を訪れた際は天気が良好だったため、金色に輝く金閣と逆さ金閣を目にすることが出来た。最終日の報告会でも発表したが、当時の日本のトップである義満の威厳を表すための外見であると感じた。金閣の次は嵐山を訪れた。1,000 年前、貴族が竹林をこよなく愛していたらしく、当時から特別な場所であったと考えられる。次に、竹林から少し離れた場所にある世界遺産「天龍寺」を散策した。天龍寺の法堂天井に「雲龍図」という迫力のある龍の絵が描かれているのだが、公開期間外の為残念ながら参拝することはかなわなかった。2 日目最後に訪れた晴明神社は、陰陽師安倍晴明を祀る神社である。晴明は呪術との関わりが深いため、他の神社とはまた違った神秘的要素があった。

3 日目は伏見稲荷大社、稲荷山を散策した。京都の観光スポットの中でもかなり有名な千本鳥居は、人の背丈ほどのものだけではなく、かなり大きなものから、車のハンドルくらいの小さなものまで大小様々であった。寄進者が鳥居の大きさを選んで奉納することができ、一番大きいもので 160 万円かかるそうだ。これらの金額と鳥居の大きさは、信仰心や神社への感謝の気持ちを表している。注意して見ていくと、今年度奉納されたものから明治に奉納されたものまであり、様々な時代も鳥居が入り混じっているので、誰がいつ奉納したものなのかを見てみるのも面白いと感じた。

今回の演習を通して感じたことは、昔から続く「文化の保存・継承」は言わずもがな非常に重要であるということだ。銀閣を訪れた際、庭園の苔を丁寧に整えている庭師がいた。その庭師の作業を見て、主要箇所だけでなく見落としてしまいがちな箇所を丁寧に手入れして初めて「文化」が成立するのだと感じた。歴史・文化に触れることで、今まで知ることの出来なかった発見や、より感性を磨けた 6 日間となり、大変良い経験になった。

写真 1 枚目「銀閣」: 2 枚目「金閣」: 3 枚目「千本鳥居（稲荷山）」

千年の都京都の寺社めぐり

１部英米文化学科　２年　2918154　高橋　久美子

私は歴史に興味をもっている。だから古都の神社、仏閣を巡りたいと思い、その建物の持っている歴史、文化を探るため、日本文化特別演習に参加した。

2 月 25 日（グループ研修）

村中先生の団体研修は、際立つ学びだった。その後、世界遺産金閣寺に行った。金箔の３層の楼閣と屋根の鳳凰に見とれた。姿を写す鏡湖池は美しかった。鯉に見立てた鯉魚石（りぎょせき）は見ることが出来なかったがじっくりと庭を巡った。

2 月 26 日（個人研修）

二日目は、地下鉄東山からバスを乗り継いで銀閣寺に行った。足利義政が造営した銀閣寺は観音堂といい、別荘である。本堂は向いの建物だ。「銀閣寺」の総門を潜ると、目の前に高い垣根が見えた。銀閣寺垣だ。私の憶測だが義政は美には自信があったのだろう。黒い漆の建築はそれを物語っている。庭は広く銀沙灘や向月台を見た。「白川砂」と呼ばれる。「銀閣寺」とは通称名であり、創建当時は黒い漆を塗っていたが、100 年もたつと劣化して白くなり、それが銀に見えたので「銀閣寺」といわれるようになったそうだ。帰りに門を見上げると大文字が見えた。その後は哲学の道を歩いた。その辺から、ゴーゴーと水が流れていた。

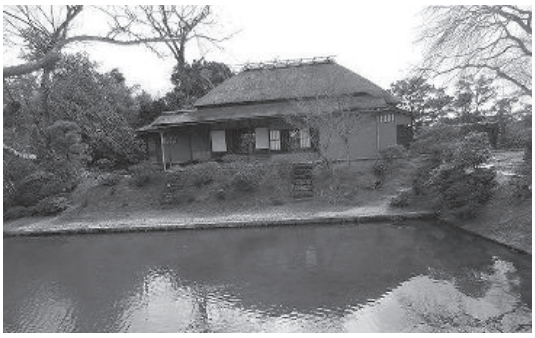
水路閣

南禅寺には、京都で唯一上がることができる山門があった。桃山美術の宝庫と言われる狩野探幽の襖がある。南禅寺のなかにレンガ造りの水路閣がある（完成は 1888 年）。エキゾチックなのに南禅寺としっくりと合っていた。その上を疎水が流れている。琵琶湖疎水記念館と蹴上インクラインを見た。琵琶湖から 35 ㎞の疎水が京都の近代化に果たした役割を紹介していた。その後、私はひたすら地下鉄東西線を目指し、右手に平安神宮の朱色の門を見ながら、坂本龍馬とお龍の婚礼場所の碑を見ながら三条京阪まで歩いた。

2 月 27 日（個人研修）

相国寺承天閣美術館に行った。国宝 5 点、重要文化財 144 点を収蔵している。次に、嵐電に乗り、嵐山の天龍寺に着いた。天龍寺は庭だけ見たがその庭は夢窓疎石作で雄大だった。野宮神社は、皇女がお籠りをするところだ。お参りし、又、嵐電に乗った。御室仁和寺、等持院、蚕の社、西院駅など雅な名前ですっかりファンになった。そして、帷子ノ辻駅がありそこに、「蛇塚古墳」があるとのことだが、時間の関係で降りなかった。

その後は、四条大宮から阪急電車で桂離宮に行った。駅から桂離宮へは歩いたが、バスをすすめる。見所は、松琴亭、笑意軒、月波楼、賞花亭、書院群だ。八条宮智仁親王と智忠親王二代により 50 年をかけて創建された宮家の別荘である。御幸門（みゆきもん）を潜り、小石を敷き詰めた霰こぼしの御幸道（みゆきみち）を静かに歩く。御腰掛けの前に蘇鉄が植えられていた。次に楽しみにしていた、松琴亭の市松模様を見た。青と白が素敵。笑意軒の腰壁張付けは、市松模様とビロードを金箔が切り裂く意匠でさすが凄いデザイン。次に、新御殿だ。この襖は、唐紙に（雲母または、キラと言う、銀、黄土）を混ぜて使う高度な職人もので、光が当たると輝くのだ。桐紋唐紙襖と言うのだが見学は不可。入り口で展示物の襖を見る。書院には、後水尾上皇（1596 年生）をお迎えする御座所に飾り棚があり、それは、黒檀、紫檀、キャラという舶来の材料で造られている。三大飾り棚と言う。御殿の寝室には「しぼ」の入った柱がある。絶対見たいと思う月見台を室内から見たかったが不可。しかし、州浜という天橋立を見立てる池、土でできた趣のある丸い橋を潜り、池を舟で渡るなど、桂離宮は宮廷文化の庭園と一言では言い表せない雰囲気を持っていたので別世界だった。ぜひとも行くことをお勧めする。



桂離宮

2 月 28 日（個人研修）

世界遺産の仁和寺に行く。もう一つの御所だ。888 年平安時代に宇田天皇により創建。天皇は史上初の法皇となった。宇多天皇は、菅原道真を重用したが、息子の醍醐天皇は彼を太宰府に流してしまった。寺には 10.7 ㎝の薬師如来座像がある（国宝で非公開）。次に、下鴨神社に行く。糺の森を通りお参りした。清らかな本当に柔らかい水が流れていて印象的だった。京都の水は、魅力的だった。最後に、1300 年の歴史がある九条ネギ料理を食べた。京野菜にも長い長い歴史があった。

全体を通して

地球温暖化で、苔の生育が難しくなっている。最近はイノシシによる被害が多いそうだ。京都の庭園、町の掃除文化には、感心させられた。うるさいくらいに皆で協力して掃き清めているのだろう。京都の人々の力を合わせること、それは、祇園祭りに顕著である。あの大きな山鉾を毎年組み立てている。四条通りを散策しながら、月鉾保存会の看板を見た。大船鉾は 2014 年に 150 年ぶりに復活したのだ。お盆の五山送り火の壮大な行事（たいまつを持って走って山を下る）を思う時、そして、明治の大事業「琵琶湖疎水」による、日本初の電気鉄道を運行したことなどを思う時、伝統と先進産業を考えた時、日本の本当の首都はどこか。その現実と実力はいまでも、森羅万象において京都だと思った。京都の歴史のみならず京都の人々の誇り、情熱を深く知り、考えさせられる演習だった。

研修旅行レポート
―京都を訪れて感じたこと―

1部英米文化学科　2年　2918177　原　潤哉

私は2月24日から2月29日までの間、京都のいろいろなところを訪れた。今回の研修旅行で初めて京都を訪れた。小学校や中学校の教科書で見たことがある場所へばかり訪れる予定を、京都へ行く前に組んでいたので、楽しみという感情はそれほどなかった。しかし、写真と実物では、写真では伝わらない細かい細部のところまで見ることができ、訪れることができてよかったと思える研修であった。今回は、私が訪れてよかったと強く思った3つの場所を紹介しようと思う。

初めは、3日目に訪れた鹿苑寺金閣である（写真1)。応永27年（1420年）足利義満によって建てられた禅寺であり、国宝に指定されている。建てられた理由にはいろいろな説があるためこれだという根拠はない。一つ言えることは、この時代足利義満の持っている権力は相当なものであったということである。その権威を示しているのがこの鹿苑寺金閣なのではないかと思う。私自身の目で見ても、鹿苑寺金閣はまさに権威を示しているものだと感じた。何故かというと、金箔がふんだんに貼られている寺は限られた人間にしか作れないと思うからだ。金箔という高級なもので寺を作ることによって、足利義満は自慢に近い形で自分の権力の大きさを皆に知らしめたかったのではないか。不思議なのは、金閣が見事に周りの風景とマッチしていることだ。ふつう木々の中に金色の寺があったとなれば、一つだけ周りより浮いているはずだが、池に写る金閣寺や木々に囲まれる金閣寺はとても美しかった。

2つ目は3日目に訪れた嵐山である。嵐山で人気スポットであるのが竹林である。数えきれない竹が生い茂っており、奥に進むにつれ竹は数を増していき、最終的には空をも覆い隠してしまうほどの竹林が広がっていた（写真 2)。風が吹くことで竹の葉と竹の葉がぶつかり合い、サーと音を立てて揺れる竹林に、心がとても落ち着いた。そして、嵐山にある天龍寺にも訪れた。天龍寺は暦応2年（1339年）に足利尊氏によって建てられた。前日にお土産屋のおばちゃんに「法堂の天井に描かれている雲龍見ておいで！」と言われ、最初は興味がなかったものの、後悔が残りそうな気がした私は一緒に歩いていた二人にむりやりお願いし、訪れた。しかし、その雲龍図は基本的に土・日・祝しか公開していないとのことで、平日に向かった私は当然雲龍を見ることはかなわなかった。お土産屋のおばちゃんを少し恨みつつも、事前の調査を怠った私も悪いということで何とか心を落ち着かせることに成功した。天龍寺の中にある曹源池庭園は、周りの風景を借りて一つの芸術作品のように感じた。それぞれの個々の力はとても弱いのだが、合わさることで全体として一つのまとまりをもっているように感じた。

最後の3つ目は4日目に訪れた伏見稲荷大社である。伏見稲荷大社で1番有名なスポッ

トといえば千本鳥居であると思う。千本鳥居と言われ千本くらい鳥居があるのだろうと想像していたが実際には稲荷山全体で１万基ほどあるとのことだった（写真 3)。大・中・小とさまざまな大きさの鳥居が存在し、お金を納めれば誰しもが鳥居を飾ることができる。山頂までの道のりがとても険しく、途中で観光客のおばちゃんのために体を張る場面もあった。鳥居と鳥居の感覚がものすごく狭く、鳥居がない道のほうが珍しいのではないかと思うほど鳥居をくぐった。私が見た中では、大正時代に作られたのが最古の鳥居なのではないかと思う。他の鳥居は木で作られているため、年月がたてば取り壊され新しい鳥居に建て替えられているそうだが、その鳥居は石で作られていたのでこれから先もその鳥居が壊されることはないのであろうと思った。山頂に行くまでに多くの人が引き返していくのを見て、私も諦めて引き返そうと少しばかり思ってしまったが、京都は何回も訪れることはできない場所なので力を振り絞って山頂までにたどり着いたのを覚えている。そこから見る京都の町並みは絶景であったし達成感はどこよりもあった。

写真 1

写真 2

写真 3

京都を歩く、京都に学ぶ
―鴨川をキーワードに―

１部日本文化学科　３年　2717179　橋本　直樹

私が日本文化特別演習の個人研修でテーマとしたことは、実際に京都を歩いて、京都の歴史や文化に直で触れるということである。北海道にいるだけであったり、インターネット等で写真を見たりするだけではわからないことを学び取り、自分の視野を広げることを目的として、個人研修に臨んだ。今回個人研修で京都を歩くにあたって、昨年度の人文地理学Ｉや人文学演習 A で学んだことを参考にし、1 日ごとにキーワードを割り当て、そのキーワードにちなんだ場所を自分の足で歩くことによって、京都の文化や歴史等に触れていった。このレポートでは、個人研修 1 日目のキーワードとして設定した「鴨川」にちなんだ場所について述べていく。

まず初めに訪れた場所は、世界文化遺産になっている上賀茂神社（賀茂別雷神社）である。注目ポイントの一つ目としては、一の鳥居からまっすぐ歩いていき、左手に見えてくる「神馬舎」である。奈良時代、日本各地では神々に馬を奉納する習わしがあり、その馬が祭事に使われたとされている。しかし、小さい社では馬を扱うことが負担になっていき、絵に描いた馬で代用していったとされ、それが絵馬になったとされている。そんな歴史が「神馬舎」から感じ取れる。注目ポイントの二つ目は、「願い石」や「ならの小川」がある「渉渓園」である。ここでは歌人たちが「ならの小川」に杯を流しながら和歌を詠んでいく「賀茂曲水宴」が行われる場所として有名である。上賀茂神社は鴨川の近くにつくられているからか、水と強く関係しているのではないかと感じた。上賀茂神社のどこを歩いていても水の音が聞こえてきて、とても風流であった。

ならの小川

次に訪れたのは、上御霊神社（別名御霊神社）である。ここは応仁の乱の発端となった地として有名で、始まりは平安京の遷都にさかのぼるといい、御霊信仰から生まれたもの

であるといわれている。入ってすぐに手水があり、ここでも水が密接に関係していることがわかる。さらに少し歩いて右手には、応仁の乱の発端の地であることを示す石碑がある。鴨川の近くにこのような歴史を示す地があるとは知らず、日本の歴史について思いを馳せることができた。

上御霊神社を後にして次に訪れたのは、賀茂御祖神社である。別名下鴨神社とも呼ばれている。ここでは水みくじが有名であろう。まずは 300 円を払って水みくじを買う。その時の店員さんが京都弁を使っていて、本当に京都という地に来たのだなと感じた。そして、「御手洗川」と呼ばれる小川にそのおみくじを浸す。そうすると、おみくじが破れることなく文字が浮かび上がるのである。北海道ではそのようなおみくじを見たことがなくとても新鮮であった。これも水と密接に関わっている京都ならではのおみくじなのであろうと感じた。私が水みくじを買って挑戦してみようとする前にも多くの人が小川におみくじを浸していたので、やはり水みくじは下鴨神社の看板的存在なのであろう。

下鴨神社

下鴨神社の次に訪れた場所は、神泉苑である。ここはとにかく水が象徴的な場所である。広さとしては、上賀茂神社や下鴨神社と比べるとそれほど大きくはない。かつては今よりも広大であったが、神泉苑の近くに存在する二条城がつくられた時に、ここをお堀としたため規模が縮小され、今の広さになったようである。鴨川の周りを歩いてみて、上賀茂神社・上御霊神社・下鴨神社のそれぞれに水との密接な関わりを感じたが、神泉苑が一番水との関わりが深いなと感じた。その理由は、多くの水があること、また歴史を感じさせる雰囲気が漂っていたからである。

今回の研修旅行で、北海道にいるだけでは全く知ることができない京都の歴史や文化というものに直に触れることができた。それに、歩くことで現地の雰囲気や音、空気を直接感じることができた。自分の目で見ることで、写真やネットの画像を見るだけでは感じ取ることができない価値観にも触れることができた。別の観点から日本文化を学びとることで、それを自分の見識を深めることができたと感じる。とても有意義な時間を過ごすことができたと胸を張って言うことができる研修であった。

新選組の足跡を辿る

1部日本文化学科　3年　2717212　多田　有梨花

京都は古くから歴史の中心地であり、その面影を今なお残し続けている。その長い歴史の中でも私が特に関心を持っているのは、幕末の京都で治安維持に努め、戊辰戦争では旧幕府軍として奮戦した新選組の存在である。そこで今回の研修では「新選組の足跡を辿る」というテーマを立てて、彼らの活動の足跡が残る場所でフィールドワークを行った。

まず自主研修 1 日目では、新選組が京都に来てから戊辰戦争が勃発するまでの活動に着目し、彼らの屯所となった壬生寺周辺、西本願寺、そして不動堂屯所跡を巡った。

初めに向かった先は、新選組が最初に屯所を構えた八木邸の近くにあり、兵法訓練場として使用していた壬生寺である。境内は中規模学校の全校集会がここで開けるのではないかと思うほど広々としており、訓練場として申し分ないなと感じた。また、本堂の壇上から組長クラスが隊員を見下ろしながら指導していたのかもしれないと思うと、少し、いやかなり興奮した。寺の敷地内には新選組の史料や、幕末以前の壬生寺の資料の展示があったが、それによると、壬生寺の歴史は平安中期にまで遡ることができるそうだ。壬生寺の歴史も大変興味深い。

次に向かった先は、江戸時代まで京都最大の花街として栄えた島原の跡地である。島原は新選組も頻繁に利用していたことがわかっているが、壬生寺から島原まで実際に歩くと 15 分ほどで着いたことから、屯所からの近さも島原に通った理由の一つかもしれないと思った。また、島原であった区域をしばらく散策すると、現住所が「西新屋敷〇之町」となっていることに気づいた。島原大門前の説明書きによると、島原の正式名称は西新屋敷であるが、江戸時代初期に現在の場所に花街が置かれるまで京都内で起こっていた移転騒動が島原の乱に似ていたことから「島原」と呼ばれるようになったそうだ。

その後、新選組の屯所の一度目の移転先である西本願寺と、二度目の移転先である不動堂屯所跡に行った。西本願寺では「太鼓楼」という屯所だった建物の外観を見たあと、少しではあるが本堂でお経を拝聴した。また、新選組が初めて自分たちの屯所として一から建築した不動堂屯所は、今はもうホテルの敷地内にひっそりと石碑が建っているだけで、戊辰戦争で儚く散っていった新選組の物寂しさを感じた。

以上のように私は三つの屯所と島原を巡ったが、実際に歩くことで屯所同士の距離がそう遠くないことに気づいた。これに関して、屯所を移転しても引き続き攘夷志士の動向に目を光らせるぞという新選組側の意図があったのではないかと考える。

自主研修 2 日目は戊辰戦争が勃発した伏見周辺を散策した。初めに向かったのは城南宮で、ここは 794 年に平安京の南部に創建されて以来、貴族や天皇に親しまれ、戊辰戦争では薩摩藩の大砲が参道に置かれ砲声を轟かせた場所である。朝廷にゆかりのある城南宮に薩摩藩が布陣できたということは、それだけ彼らが朝廷とのコネクトを有していたことを表しており、戊辰戦争が新政府軍の優位性を持った戦いであったことがうかがえる。

それから、休憩を兼ねて城南宮の西鳥居の向かい側にある「おせきもち」を訪れた。この店は戦国時代からの長い歴史を持つ老舗で、かつて新選組局長の近藤勇もよく利用した店であるそうだ。近藤勇が好んだ味を自分も体感してみたいと思い、店内のカフェスペースで実食した。ここの名物おせき餅は、丸い餅の上に粒あんが乗っているシンプルなものだが、餅は舌触りが良くコシもあり、あんこは甘すぎず餅との抜群の相性を誇るもので、「美味い」の一言に尽きる最高の味であった。セットで頼んだ抹茶は、おせき餅の甘さと抹茶の苦さが口の中で一切争わず、互いに互いを受容しているという素晴らしいマッチングで、これまた「美味い」以外の言葉が出てこない。ぜひ色んな人に紹介したいお店であった。

次に訪れたのは、旧幕府軍が布陣した伏見奉行所跡と新政府軍が布陣した御香宮神社である。伏見奉行所は現在は団地が建っていて石碑しかないが、かつての敷地面積はかなり大きく、江戸幕府の権威がどれほど大きかったかがわかる。一方、伏見奉行所から約 150 m坂を上ったところにある御香宮神社は、伏見奉行所よりかなり高地にある。鳥居から伏見奉行所の方向を見てみると、現在は高い建物で見えないが、神社から見下ろせる形になっていたのだろうと思われ、新政府軍はかなり優位な布陣であったといえる。実際、御香宮神社から砲弾を浴びせられたことにより伏見奉行所は炎上し、会津藩や新選組も奮闘したものの敗走に至ったという史実になっており、敵に頭上から見下ろされるような布陣をした旧幕府軍の敗北は必然であったといえよう。しかし、このような劣勢の中で御香宮神社に向かって進軍していった新選組の勇敢さは素晴らしいものであったと思う。

このように戊辰戦争の激戦が繰り広げられた伏見周辺を散策したが、新政府軍の陣の優位性が非常によく感じられた。新政府軍は近代的な戦法を用いたことも勝因ではあるが、開戦前の準備の良さなども彼らの勝利に大きく寄与していたのではないかと考えられる。

以上のように、私は自主研修で京都の新選組の活動の足跡を辿った。様々な場所を自分の足で歩き、自分の目で見ることで次々に新しい発見や疑問が生まれ、京都における新選組及び幕末に対する理解を深めることができた。ここで得た学びを今後も深めていきたい。

写真①：壬生寺の本堂を境内の端から撮影したもの。
写真②：おせき餅（抹茶セット）。

空海を通じて日本の仏教文化を学ぶ

2部日本文化学科　2年　2818105　伊藤　あゆ

はじめに

京都といえば、日本文化の発信地であると考える。私が今回の研修を行うにあたって考えたことは、日本文化を肌で感じたいということだった。しかし日本文化といっても様々なことが挙げられる。そこで焦点を当てたのが「空海」だった。空海と言えば、平安時代を生きた真言宗の開祖である。また、嵯峨天皇や橘逸勢と並び日本で最も書が堪能な「三筆」に数えられている人物でもある。弘法大師という呼び名が有名であり「弘法も筆の誤り」「弘法筆を選ばず」といった言葉の基にもなっている。

私はそんな多才な空海を通じて日本の仏教文化の一端を見学することで、その理解を深めることが出来ればと思い、本研修の目的とした。

2/27

初日はまず大覚寺へ向かった。大覚寺は空海の勧めによって嵯峨天皇が浄書した般若心経が奉安されていることから、写経道場としても知られているのだという。本堂は五大堂と呼ばれ、不動明王や愛染明王といった五大明王が祀られており、ここは空海が建立したと言われている。

寺子屋写経

写経道場ということで、私も写経を体験してきた。今回体験したのは寺子屋写経という短時間でできるものである。ここでは筆ペンを使ってひらがな、カタカナ、漢字で「南無大師遍照金剛」という言葉をなぞったり、自分の願い事を書いたりした。最初は簡単にできると思っていたが、慣れない筆で綺麗に書かなければいけないという意識が働き、非常に時間がかかってしまった。また空海の像の前で行うため、なぜかプレッシャーを感じると同時に、集中力の高まりも感じることができた。

大覚寺の後は、東寺を訪れた。この寺院は空海が造営し、数多くの国宝が所蔵されている。ここで特に印象に残っているのは講堂にある立体曼荼羅である。立体曼荼羅は、空海の教えを表現するもので、21軀の仏像が安置されているというものだ。精巧な仏像が1つの場所に集まっているだけでも圧巻であったが、そんな中でも真ん中にいる大日如来には特に目を引かれた。この像は他の像とは違い顔つきが穏やかで、その目からは厳しさの中の優しさのようなものを感じた。

2/28

この日の目的は前日に見た仏像と比較してその造りの複雑さを学ぶということであった。そこで、初めに六波羅蜜寺を訪れた。六波羅蜜寺の宝物殿には有名な快慶の弟子が作った

空海の像が安置されている。他にも薬師如来坐像や十一面観音立像なども見学することができた。これらは空海の生きた平安時代に作られた作品である。同時代の作品にも関わらず空海の立体曼荼羅のような豪奢な雰囲気は感じなかったが、シンプルで洗練されたその造りに感銘を受けた。ところで、六波羅蜜寺にはかの有名な空也上人の像がある。この像は教科書にも載っており、その特徴的な出で立ちが印象深かったので是非一度見てみたいとかねてより思っていた。実際に見て、口から仏様を出している姿は非常にユニークで見ごたえがあると感じ、その場に長時間留まってしまった。

六波羅蜜寺の後、ほど近くにある西福寺へ行った。この寺院には、空海作六道の辻地蔵尊が祀られている。六道の辻地蔵尊は子育て地蔵なのだという。こぢんまりとした寺院に小さく祀られていたが、それもまた趣があって良かった。地元の人が何人かいてお寺の方と談笑しており、地元の人に大事にされている寺なのだと感じ、同時に京都では寺院が非常に身近な存在なのだという事が分かった。

2/29

この日は今熊野観音寺に赴いた。この寺は嵯峨天皇の勅命により空海が開創した寺院で、彼の作った十一面観音菩薩がご本尊になっているのだという。山の中に位置しており、参拝するまでに険しい坂道を歩いたが、鳥居橋と呼ばれる赤い橋を渡って境内に入り、本堂にて件の十一面観音菩薩像を参拝したとき、その非常に立派な像の姿を見て、努力して見に来て良かったと感じた。入口の橋と同様に赤く塗られたお堂の真ん中に、非常に細かい装飾を施され、穏やかな表情を浮かべている十一面観音菩薩は、後白河上皇の持病である頭痛を治癒したことから、頭痛除け・ぼけ封じの力を持つとされているのだという。余談だが私は以前から頭痛に悩まされていたので、いつより多めにお賽銭を入れてきた。これで頭痛が良くなると信じたい。

境内には本堂の他に、空海を祀った大師堂や五智水と呼ばれる井戸があった。五智水は空海が錫杖で岩を突いた際に水が湧きだした井戸であるされており、今も水が湧き続けている。非常に霊験あらたかな場所だと感じるが、現在は井戸に蛇口が設置されており、捻ると水が出ているようになっていたため、非常に奇妙な感覚に陥った。

おわりに

京都での 3 日間に及ぶ自主研修で、数多くの仏像を見学することができた。また、写経という体験的な活動もでき、実際に足を運んで現地の空気を肌で感じることで分かることもあるのだと改めて感じることが出来た。ただ、今回たくさんの寺社を訪ねたが、私の勉強不足で伽藍配置や仏像の意匠等の専門的な知識をもって見学をすることは出来なかったので、そうした観点を身に付けることをこれからの大学生活での学びの目標としたい。そして、再び京都や寺社を訪れた際にはさらに深い感慨を抱くことができるようになっているように努力したいと思う。

森見登美彦の描いた世界を巡る

2部日本文化学科　2年　2818109　甲斐　耕介

私はこの日本文化特別演習を受講し自主研修を行うにあたり、テーマを「小説家『森見登美彦』の描いた世界を巡る」と掲げ自主研修を行った。作品に登場する地を巡り、作品に対する理解を深めるために京都の街や山を探索した。本レポートではその自主研修の中で印象に残った事を中心にまとめていく。

初めに今回の研修について述べるにあたり、テーマである森見登美彦という作家について説明する必要があるだろう。森見登美彦は奈良県出身で京都大学農学部を卒業している。2003年、在学中に執筆した『太陽の塔』で日本ファンタジーノベル大賞を受賞し小説家デビューを果たした。「ヘタレでインテリな、恋愛にはめっぽう弱い京大生」という主人公を書くことが多く、基本的に舞台は京都である。ジャンルは恋愛小説から怪談、SFなど多岐にわたる。

今回の研修では森見作品の中で特に好きな『太陽の塔』、『夜は短し歩けよ乙女』という2つの作品の舞台となった場所を中心に訪れた。この 2 つの小説はどちらも先に述べた様な「ヘタレ大学生」を主人公とした作品となっている。

1日目には、鞍馬山へ向かった。鞍馬山は『夜行』の舞台にもなっている。森見作品にはしばしば「天狗」が登場しており、『夜は短し歩けよ乙女』にも天狗を自称する人物が登場している。そんな天狗が住むと言われる鞍馬山を巡った。鞍馬駅で叡山電車を降りて駅の外へ出ると、まず「大天狗」のモニュメントが出迎えてくれた。高さが 4 メートルあるらしく、その迫力はなかなかのものだった。大天狗に挨拶を済ませ、由岐神社、鞍馬寺、貴船神社の順に参拝した。鞍馬山に着いたのは午前10時位だったのだが天気が曇りであったためにどんよりとして暗く、他の観光客も少なかったため、荘厳な雰囲気を肌でひしひしと感じることが出来た。北海道ではなかなかお目にかかれないような樹高の木々が生い茂っており、自然の力強さを感じながら鞍馬寺本殿へとたどり着いた。本殿からの景色を楽しんだ後、貴船神社へと向かった。貴船神社までの道は下りではあったものの、かなり険しい道のりで、何度か足を踏み外しかけた。来年度以降の受講者で鞍馬山に訪れようと考えている人がいれば、履いていく靴には注意した方がよいだろう。半日ほどかけて巡り終わったときにはかなり疲労を感じたが、貴船で食べた天麩羅そばは格別の味だった。

鞍馬駅前の大天狗

2日目には伏見稲荷も登山したが思いの外こちらも過酷な道のりであった。達成感はあっ

たが道中にそれほど見所があった訳でもなく、伏見稲荷を登り切って言えることは「何か特別な理由が無いのであれば伏見稲荷の登山はおすすめしない」ということだ。来年度以降の受講者の参考になれば幸いである。

3日目は元々下鴨神社→京都大学→吉田神社を巡るという予定に加え、急遽太陽の塔へ行くことを発起。朝一番の電車に飛び乗り万博記念公園へと向かった。

太陽の塔　外観

森見登美彦のデビュー作の題名でもあるこの太陽の塔は本書のヒロインが心奪われた芸術作品である。この太陽の塔は中に入ることが可能で、私も実際に見学することが出来た。内部の様子は、白を基調とした外観とは打って変わってサイケデリックという形容がふさわしい赤を基調とした配色のフロアに、岡本太郎の芸術が並べられていた。外観とのギャップも相まって実際に目にするととても見応えがあった。是非この報告書を読んでいる方々にも中に入って実際に体験することをおすすめしたい。その後公園内のパビリオンで日本万博や太陽の塔について資料を閲覧し、京都に戻り下鴨神社へ向かった。訪れた際は催し物の類は開催されていなかったが、下鴨神社の境内では毎年8月頃に古本市が行われているらしく、作品にも古本市が登場しているため次に訪れる際には是非参加したい。その後、徒歩で京都大学へ行き、外側から一通り見て回った後、京大のすぐ近くにある「進々堂」という『夜は短し歩けよ乙女』にも登場した喫茶店で遅めの昼食をとった。その後、哲学の道を見学し、3日にわたる自主研修を終えた。

この講義の自主研修では1日目、2日目は登山、3日目も基本的に徒歩での移動としたため、かなり身体を酷使した旅程となってしまった。しかし自分の足を使って見る景色や経験は写真や資料等で見るよりも得られるものが多く、身をもって体験することの重要さを学んだ。この講義を通して、自分の想像力だけで作品を読むのではなく、舞台を実際に見て回ることで、情景の描写等作品に対する理解を深めるという体験をすることが出来た。実際にフィールドワークを行い普段とは違う物事へのアプローチの仕方も学ぶことができ、自分にとって実りのある研修となった。

京都研修レポート

2部日本文化学科　2年　2818125　栃本　賢志

今回の日本文化特別演習において、わたしは妖怪に関連する建造物をテーマにして各地を周った。

一日目の団体研修では、大阪府堺市に点在する古墳群、百舌鳥古墳群を見て周った。大小さまざまな古墳を見ることが出来たが、その中でも特に印象に残ったものは「いたすけ古墳」という古墳だった。形としてはわたし達が古墳と言われてイメージする形の前方後円墳で、大きさとしては付近にある仁徳天皇陵古墳、履中天皇陵古墳などに比べれば小さく見える大きさだったが、いたすけ古墳は都市開発の為に架けられた橋が壊されたままに残されているという特徴を持っていた。その橋は古墳の文化的価値が周知されていなかった頃に架けられたもので、今後古墳が取り壊されぬように戒めとしてそのままにしているという。その話をガイドさんから聞き、ただ無責任に放置されているわけではなかったのだという納得から特に印象に残った。

二日目には京都市内に残された歴史的建造物などを巡りつつ立命館大学の方角へと歩を進めていった。この日に巡った建造物も、一日目の古墳群のように閑静な住宅街のなかにポツリポツリと点在しており、この日に紹介してもらった路傍祠などは三日目以降も色々なところで確認することが出来た。立命館大学に到着した後、わたし達のグループは京都鉄道博物館へ向かった。諸事情によって急きょ組み込んだスケジュールで、さほど興味もなかったジャンルであったが、すでに廃線となった鉄道本体の展示、改札の仕組みなど本来見ることのない筈のものの仕組みを知ることができ、最終的には閉館時間になるまで滞在することとなった。少しでも鉄道に興味のある方は是非とも行ってみて貰いたい。

そして本格的に自主研修が始まった三日目、わたしはテーマになぞらえて天狗伝説が残る鞍馬山へと向かった。当日はあいにくの曇天で道もぬかるんでいたが、逆に悪天候であったことで、鞍馬山全域に漂っていた畏敬すら感じてしまう雰囲気がより際立っていた。かの牛若丸（源義経）が鞍馬天狗に鍛えられていたというのも頷けるような環境であった。鞍馬寺の他にも、同じく鞍馬山内にある由岐神社や、下山口のすぐ近くにある貴船神社などにも訪れた。わたしが鞍馬山に訪れたときには残念ながらケーブルカーは運休しており、歩いて登ることとなったが、結果として鞍馬山の空気を肌で感じつつ、ゆっくりと見物することが出来た。道が険しかったため、足を痛めることは必至とも言えるが、写真、映像で見るだけでは得ることのできない貴重な体験をすることができた。今後再び京都に観光しに行く際には、もう一度訪れたいと思う。

続いて四日目にはかの有名な陰陽師安倍晴明が祀られている晴明神社、百鬼夜行が通り、亡くなった人が蘇ると言われている一条戻橋を見物した。晴明神社には陰陽道において魔を退ける印として扱われている五芒星の印が至る所にあった。なお五芒星は他にも木・火・土・金・水からなる五行と結びついているものとして、神聖視されていたという。

次にわたしは二条城へ向かった。この日も天気が安定しておらず、にわか雨にさらされたが、城内にあった日本庭園は依然として美しく、二の丸御殿内では廊下の鶯張りや襖、屏風に描かれた四季折々の花々を見物することができ、趣深さを感じることが出来た。残念ながら本丸御殿は修繕中で見ることは叶わなかったが、2021年に修繕完了の予定のため、上記の鞍馬山同様に再び京都に訪れた際には、本丸御殿も含めて改めて観光したいと思う。

四日目の最後には西国三十三所の内の一つ革堂行願寺へ向かった。行願寺はおおよそ千年もの歴史をもつお寺で、観光客はわたしのほかにはおらず、落ち着いて参拝できた。こういった住宅街に寺社がひょっこり現れるという点も京都の魅力だと感じた。

自主研修最終日はまず紫式部がかの有名な『源氏物語』を執筆したというお寺、廬山寺を見物した後、京都漫画ミュージアムで妖怪に関する漫画を閲覧した。通常時でも妖怪に関する漫画が多かったが、夏になると納涼の為の妖怪特集が組まれてさらに多くの漫画が集められる。

その後は有名な観光地として知られる伏見稲荷大社へ向かった。ここは今まで向かった観光地よりも格段に観光客が多いように感じられたが、稲荷山の頂上に向かうにつれ、リタイアしていく人が多くなり、最終的には落ち着いて観光することができた。しかし人が減っていくにつれ雰囲気は出てくるというもので、神隠しがあったという噂もあながち嘘ではなかったのだと恐怖に慄きながら登頂を目指した。時間にして一時間と少しといったところで登頂できたが、想像していた景色とは違った景色だったが、登頂したという達成感を味わえる上、一ノ峰、二ノ峰などの参拝場所があるため、伏見稲荷に観光に来て時間があるという方は是非登頂を目指してほしい。

この研修を通して「歩いて学ぶ」ということは非常に大切なことだと学ぶことが出来た。

本来予定に組み込んでいた筈のバスに乗り遅れ、せっかくならと京の街を散策しながら目的地に向かい、鞍馬山、稲荷山では独特の空気を感じながら、先人が残した建造物をじっくりと見物する、普段では目をやらないような高さまで目線をやってみる。そうすることで通常知り得ないことまで、知識として吸収することができる。今度は慣れ親しんだ土地も携帯ばかりに目をやらず、歩いて色々なものを目に焼き付けようと研修を通して思った。

ただこの研修では山二つを登頂した上に移動もほぼ徒歩だったために疲労のたまり方がすさまじかった。具体的に言えばとにかく足が痛かった。「歩いて学ぶ」、無論重要なことではある。ではあるが自身の体調とも相談しながらフィールドワークを行うことも忘れてはいけないことだ。

寺社仏閣をめぐる

2部英米文化学科　2年　3017133　山根　名那美

研修旅行は5泊6日の長旅のうちの3日間は自由行動が設けられたので、私は京都、滋賀、奈良、和歌山の寺社仏閣を訪ねた。

自由行動の1日目､私は前々から訪れてみたかった和歌山県の熊野本宮大社へ向かった。京都駅から出るバスに乗って約6時間。その間、うたた寝をしながらも窓の景色を眺めていると、京都の街並みから山の景色に徐々に変わっていく。これから神聖な世界へと入るのだなと期待に胸が膨らむ。その途中、大きな川があったが私が普段目にする豊平川とはちがい、流れが静かで浅い。しかし川よりも砂利の面積のほうが大きい感じがした。以前、NHKの『ブラタモリ』という番組では熊野の川を賽の河原と例えていたが、確かにそのようなうらさびしいものを感じた。

右の写真は、熊野本宮大社の鳥居と熊野のシンボルである八咫烏である。本宮大社によるとこの八咫烏は主祭神、家津美御子大神（スサノヲノミコトともいう）の使いで、導きの神としても信仰が篤い。長い階段を上り、途中にある祓戸大神という場所でお参りをしてから、身を清め境内へ参る。この神社は主祭神のほかに天照大神など四柱の神様をお祭りしている。階段を上ってすぐ左には拝殿があり、その奥に四つの社と八百万の神々を祭る社がある。冬であったため人もほとんどおらず、静かに参拝することができた。それぞれの神様にお参りをした後、本宮大社から徒歩約10分の大斎原へ向かう。この大斎原はかつて熊野本宮大社があった場所である。しかし、明治期の洪水により社殿は今ある場所へ移されたのである。道を歩くと大鳥居がある。高さが約34mあり、北海道神宮の鳥居よりはるかに高く圧巻である。この鳥居を通り奥の木々が生い茂る中を進むと視界が開ける。奥には小さな石の祠があり、これはかつての洪水で流された社の神様をお祀りしている。周りを木で囲まれ、上から日の光に照らされるなか佇むこの小さな祠には、静かな威厳を感じた。

この熊野は「蘇りの地」といわれる。周りを見渡せば山に囲まれており、人もあまりいないため、自然の神秘的な力を感じる。また先ほど記述した熊野に流れる川は、三途の川を彷彿させるような寂しさを感じる。洪水が起こる以前は川を渡って本宮大社へ参拝していたという。川を渡ることによりいちど死に、参拝後は蘇るということを熊野詣は現していたのだろう。この日、川は渡らなかったが、熊野本宮大社で参拝したことにより蘇りを体験できたのではないかと思う。

2日目は、滋賀の比叡山延暦寺、京都の西芳寺、大覚寺を訪れた。この日も朝早くに出発し、京都駅から約一時間半。比叡山延暦寺を訪れた。電車に乗って窓の外を見ると山頂あ

たりに雪がかぶっている。比叡山のふもとのケーブルに乗り、延暦寺へ向かい上っていると雪がちらつき、遠くには琵琶湖がうっすらと見える。延暦寺には東塔、西塔、横川の 3 つのエリアに分かれるが、今回は東塔を見て回った。東塔には根本中堂という、延暦寺の中心的なお堂がある。残念ながら工事中であったため、中堂の姿を見ることはできなかった。中には薬師如来とご本尊の前には、1200 年の間灯り続ける不滅の法灯がある。また、中に入って参拝するとき、お坊さんがお経を唱えており、参拝者よりも低い位置にいたのである。ほかのお寺なら、お坊さんも参拝者も同じ目線でご本尊の前にいるのだが、根本中堂は違うようでとても興味深かった。

西芳寺へ参拝するためには事前に応募して参拝証を手に入れなければならない。冬の期間は有名な苔の庭は閉めているため、美しい襖絵を鑑賞し短い座禅体験をする。西芳寺曰く庭の苔を休ませるためだという。しかし、本堂へ向かう道に美しい苔があったのでとても満足した。本堂の襖絵は堂本印象という画家が描いた抽象画である。これはぜひとも見ていただきたいほど美しい絵である。本堂の中を歩いていると中庭のようなものがあり、そこに花を咲かせる木（梅か桜か判別がつかなかった）があった。しばらく眺めていると、雪がちらちらと舞い降り暖かい日の光に照らされているのを見た。風情があり感動した。

大覚寺は嵯峨天皇が般若心経を収めたお寺であり、また般若心経の根本道場でもある。私は以前、大覚寺で写経を行ったのだが、今回、二度目の写経体験を行った。短いお経ではあるが、気が緩むと字が崩れるので真剣にならなければならない。書いて初めのうちはいろいろ雑念が起こるが、だんだん心が落ち着いてくる。普段はこのような感覚になることはないので写経が終わった後しばらくはボーッとしている。大覚寺は嵯峨嵐山のほうにあり、渡月橋などがある、嵐山より奥まった地にあるのであまり人は多くない。しかし、静かであるため落ち着いて写経ができるのである。写経が終わった後は大沢池をしばし眺めていた。とても大きな池で嵯峨天皇が中国の洞庭湖を模して造られたという。

3 日目は京都の貴船神社と奈良の春日大社を訪れた。貴船神社は水の神様をお祀りしている神社である。本宮、結社、奥宮の三つの社がある。本宮と奥宮には同じ水の神様が祭られているといわれているという。タカオカミノカミという火の神から生まれた水の神である。火の神から水の神が生まれるのはロマンチックだと思う。この日は晴れていたのだが、前日の雨もしくは雪の水が神社を囲う木々の葉から零れ落ちていたため雨が降っているようであった。周りは山に囲まれ、近くには川が流れているこの神社には清々しい空気が流れており、心が浄化されるような心地がした。この神社は雨乞い、雨止みのために天皇が馬を捧げて祈願したという。それが絵馬の発祥となったという。

奈良の春日大社は奈良に都があった時代に作られた古い神社である。社殿の中には主祭神のほかに多くの神様を祭る社がある。いつでも開いているわけではないが、特別参拝というものがあり、拝殿よりももっと近くで神様のもとで参拝できるのである。また、本殿近くに直江兼継が奉納した灯籠があるので、歴史好きの方には見ていただきたい。

寺社を巡る

2 部日本文化学科　3 年　2817141　三浦　真嗣

私は、歴史・神社仏閣が好きである。今回日本文化特別演習で京都を訪れたのは、神社仏閣を時間の許す限り訪ねて回ろうと思ったからである。

一日目（2 月 26 日）

自由研修初日ということもあり、自由研修 3 日間中一番歩いたかもしれない。まず、朝一番に、豊国神社へと足を運んだ。ここでは、朝早かったこともあるのだろうか、人が全然居なかった。それはさておき、鳥居と社殿の大きさに驚かされた感動は忘れようにも忘れられない。明治期に入って再建された豊国神社は、関白秀吉公を祀っているだけあって、作りもとても豪華だった。また、宝物殿にも足を運んだ。そこには、秀吉公の「奥歯」が良好な状態で保存されていた。他にも秀吉公ゆかりの品々が大切に保存されており、地元の人々に愛されていたのだなと感じた。

次に行ったのは方広寺である。方広寺は、豊国神社の隣に建てられている。方広寺と言えば、「国家安康、君臣豊楽」の鐘で有名なお寺である。その鐘の実物と歴史の一舞台に立てたという事は、何事にも代えられない嬉しさがあった。

次は、三十三間堂である。正式名は、蓮華王院本堂という。ここは、日本一の千体観音堂と言われており、本堂中央にそびえたつ中尊、その左右に 500 体ずつの仏像、風神雷神像、二八部衆像と言われる木造の計 1,031 体の仏像が安置されている。仏像の多さに圧倒され、感動すら覚える空間であることは間違いない。

次に、慈照寺銀閣に行った。教科書でしか見た事が無かったが、実際に足を運んでみた第一印象は、「意外と広い」だった。銀閣は、見た目の派手さが無く、落ち着いた雰囲気であり、庭園が小高い丘の様になっており、下から見る銀閣と上から眺める銀閣とでは印象が全く違うことに気づいた。森や苔などの色と、銀閣の色味が絶妙にマッチしており、現在も過去も同じような構図に落ち着きや“美”を感じていたのだなと思った。

最後に貴船神社へ参拝しに行った。ここは縁結びで有名な神社で、恋仲はもちろん、仕事やプライベートでの良縁を授けてくれることで有名である。ここは、水神を祀っているため山奥にあり、本殿も山を登ったところにあるため、かなり体力は使うが、神社の雰囲気はもちろん、山と川の奇麗さは何とも言えない美しさがあった。

二日目（2 月 27 日）

二日目の最初は、鹿苑寺金閣を訪れた。こちらは銀閣とは対照的で、金箔が建物に貼られ、豪華絢爛であった。流石に建物内部まで立ち入るころはできなかったが、建物のインパクトは抜群だった。庭園の水面に映る金閣に感動すら覚えた。

次に訪れたのは、嵐山だ。嵐山と言っても、そこに何か建物がある。というわけではなく、天を覆わんばかりの竹林が生い茂っている地域である。北海道では見ることのできない風景に新鮮さを感じた。竹林のすぐそばに、天龍寺というお寺がある。時間があったので立ち寄ってみた。天龍寺は、足利尊氏が後醍醐天皇の菩提を弔うために建立した。その庭園は、「借景」と呼ばれており、お寺の庭園とそれ以外の景色をうまく融合させた落ち着く空間となっている。

最後に、晴明神社を訪れた。この神社は、陰陽師で知られている安倍晴明を祀っている神社である。魔除けのご利益を頂きに行ったのだが、神社の周りの土地開発が進んでおり、マンションや一軒家に囲まれていることに驚いた。時代の流れには逆らえないのだろうか。

三日目（2 月 28 日）

自由研修最終日は、伏見稲荷大社へと行った。この神社は、全国にある“お稲荷さん”の総本山である。また、千本鳥居が有名で外国人観光客が沢山の写真を撮っていた。伏見稲荷大社の本殿までは軽い山登りのような感覚で歩けるのだが、山頂まで歩こうとすると、これがまた辛い。緩い上り坂を想定していたが、そんなはずはなく、急な斜面を石階段で何メートルも登るのだ。流石に足が疲れたが、山頂からの景色はとても見晴らしがよく、絶景だった。

まとめ

ある程度インターネットで予備知識をつけてから現地へ赴いたが、やはりネットでの情報、写真では感じることのできないものがあった。歴史と一言でまとめていいのか不安になるぐらい壮大で、美しさを感じた。今回の研修を通して、教科書やネットで知識をつけるのは良いが、実際に現地へ赴き、実物を見る。といったフィールドワークの大切さを、身をもって感じた。

写真一枚目：慈照寺銀閣
写真二枚目：鹿苑寺金閣

御朱印帳と共に都七福神めぐりを行ってみて

2部英米文化学科　3年　2817142　宮田　優香

私は今回、都七福神めぐりと呼ばれるものを行ってみた。そしてただ行うだけでなく、御朱印帳と共にめぐってみようと思った。この都七福神めぐりをしようと思ったきっかけは、『京都札所めぐり御朱印を求めて歩く巡礼ルートガイド』という本を読んだ際にこの都七福神めぐりというものが歴史あるものだということを知ったことであり、今回の京都研修でめぐってみようと思った。

この都七福神と呼ばれる寺社は、京都ゑびす神社、松ヶ崎大黒天、東寺、六波羅蜜寺、赤山禅院、革堂行願寺、萬福寺の 7 つの寺社から構成されている。京都ゑびす神社が商売繁昌のゑびす様、松ヶ崎大黒天が開運招福の大黒天、東寺が七福即生の毘沙門天、六波羅蜜寺が福徳自在の弁財天、赤山禅院が延寿福楽の福禄寿、革堂行願寺が不老長寿の寿老神、萬福寺が諸縁吉祥の布袋尊となっている。私は今回先に紹介した寺社の順番で訪れることにした。7 つの寺社の場所や規模は様々であった。京都の街中に存在するものもあれば京都の街中からは少し離れた閑静な住宅街の中にあるものなど場所はバラバラであり、規模も入口の鳥居から全ての敷地を見渡せる規模の寺社から全て拝見するのに時間を要する寺社まで様々であった。寺社めぐりを行うのも御朱印をいただくのも初めての体験だった。

まずは一通り参拝を済ませた後に御朱印をいただくという流れで 7 つの御朱印を集めることが出来た。7 つの寺社の特徴を述べていく。まず京都ゑびす神社、この神社は街中にある小さめの神社であった。鳥居にゑびす様の顔がついておりその下が受け皿になっていた。この受け皿に向かってお金を投げ、入ると商売繁昌するといういわれのあるものだった。他の参拝客もその受け皿に向かってお金を投げている光景を見ることができた。

次に松ヶ崎大黒天。ここは京都の街中から少し離れた場所にある静かな場所だった。参拝客は私以外に 1 組しかおらずゆっくりと拝見することが出来た。東寺はさすがの観光地であり、参拝客が 7 つの寺社の中で一番多かった。私が参拝した時は五重塔の中が公開されており中の像も見ることが出来た。六波羅蜜寺は清水通から少し中に入った場所にあった。学問の神ということもあり受験生の姿が見られた。赤山禅院は街中から少し外れた場所にあり、石の階段で一周できるコースになっており見ごたえがあった。革堂行願寺は街中の住宅の中にあったが静けさもあり街中にいることを忘れてしまうような落ち着いた気持ちで参拝することが出来た。最後に萬福寺は宇治の方にあり少し移動に時間がかかった。中は広々としており 7 つの寺社の中で一番の広さを持つ寺だった。黄金の布袋様の像はとても大きく、素敵な笑顔で参拝客を迎えてくれているように見えた。このように 7 つの寺社をめぐってみたが 7 つ全てが様々な特徴がありとても見ごたえがあった。規模も場所も様々だったがすべてに共通することは、どの寺社も京都の人やその地域の人に大切にされている寺社だと感じられた。

このように今回、御朱印をいただきながら都七福神めぐりを行ってみるという体験はとても有意義なものになった。ただ寺社をめぐるだけでも良いが、御朱印をいただくことでその寺社に行ったという証にもなりひとつのコレクションを集めきったという達成感も味わえた。私は今回本の記載順で寺社をめぐってみたが、少々移動が大変だった。私がオススメする寺社めぐりの順番は、赤山禅院→松ヶ崎大黒天→革堂行願寺→京都ゑびす神社→六波羅蜜寺→東寺→萬福寺の順番でめぐると移動がスムーズになり、ひとつひとつの寺社をゆっくりめぐることが出来ると思う。またこの都七福神めぐり以外にも共通して言えることだが、寺社の中には坂道や石でできた階段を上ることもあるので、動きやすい恰好や歩きやすい靴でめぐることも大切だと思う。そして御朱印をいただく際は御朱印代を払うのが一般的で、金額は寺社によって様々だが 300 円が多い。おつりが無いように小銭を多めに用意しておくことも寺社めぐりの大切な点であると感じた。日常生活とは違う少し緊張感のある空間を味わうことができ、京都の私鉄やバス、土地を感じながら楽しく 7 つの寺社をめぐることができた。

初めての寺社めぐりが京都というあまり馴染みのない土地だったということもありバスの乗り継ぎや最寄駅から寺社までのルートを調べながら移動するのは少し大変だったが、今はスマートフォンで寺社の最寄駅までの乗り継ぎや最寄駅からのルートも案内してくれるのでそれを頼りに移動すれば目的地までしっかりとたどり着くことが出来た。調べながら移動するのもこの寺社めぐりの一部であり重要な事であったと最終的には思えることが出来た。加えて京都は寺社を示す案内看板がいたるところにあり、その看板を頼りに移動すると目的地まで迷うことなく到着することが出来た。これは観光地京都ならではの良さであったと思う。私の初めての御朱印集めと寺社めぐりはとても有意義なものになった。今後も寺社めぐりをしてみようと思い、旅行の際は御朱印帳を持っていこうと思う。興味のある人はまず御朱印帳を購入して近所の寺社に是非参拝してほしい。

赤山禅院にて都七福時の旗と七福神

京都の抹茶とカフェ

2部日本文化学科　3年　2817146　八巻　栞

今回の個人的テーマは京都の抹茶とカフェの関係についてである。皆さんは、京都のお土産といえば何を思い浮かべるだろうか。八つ橋などのお菓子に加え京漬物、某店のあぶらとり紙、和モチーフの物など沢山あるが、抹茶を使用した食べ物を思い浮かべる人も多いのではないだろうか。そして、京都市内にはカフェが多数みられるため、今回は京都市内のカフェと抹茶を使用したメニューの関係を調査すると共に、宇治抹茶の産地に足を運び、抹茶について学びを深めた。

まず自主研修一日目、なぜ京都府が抹茶で有名になったのかを調べに宇治抹茶で有名な京都府南部の宇治市を訪問した。宇治に茶が伝えられたのは鎌倉時代のことで、栄西禅師が中国から茶の種を日本に持ち帰ったのが始まりとされている。宇治の琵琶湖を水源とする豊かな水資源と、宇治の川霧といわれる霧、温暖な気候が茶に適していたのだ。茶について学びを深めるため、江戸時代に朝廷や徳川幕府の茶の御用をつとめた茶師・上林春松家の長屋を使用した宇治上林記念館にお邪魔した。ここで、宇治茶が御茶壺道中（1633-1867）で江戸へ毎年献上されていたことを知った。御茶壺道中の道を遮らず優先して通すことと幕府から命令が出ており、茶の地位が確立されていったことを学んだ。また、4 月下旬～5 月上旬に御茶壺道中は出発していた。ちょうど茶葉の収穫時期と重なるため、より新鮮で美味しい茶を江戸へ届けようとしていたのだと展示されていた資料や茶壺を見ながら実感することができた。

次に、抹茶の老舗である辻利兵衛本店と、福寿園宇治工房を訪問した。辻利兵衛本店では、茶葉本来の味が分かる一番茶を味わった。平日だったことと某ウイルスの影響もあってか店内に私しかおらず、梅の咲いている日本庭園を見ながらお茶菓子と宇治茶のセットをいただいた。自分で水を注ぎ一杯一杯飲んでいくスタイルで、三番茶まで味わうことができた。福寿園宇治工房では、茶臼で碾（てん）茶を挽いて抹茶にし、点てて試飲する体験をさせていただいた。抹茶とは、原料の茶葉である碾茶を石臼で細かく挽いて粉状にしたもので、昔は高級品で庶民は口にすることが出来なかった代物だ。昭和に入ってから庶民にも普及していったと担当の方から教えていただいた。2 杯ぶんの抹茶を点てるために 15 分間茶臼を回し続けなければならず、腕が大変辛かった。現在は機械で一定のリズムと力で挽くことができるが、人が回すと少しの力加減で抹茶の味が変わってしまうらしく、とても繊細な作業である。挽きたての抹茶を点て、一口飲んでから和菓子を口にすると、抹茶の豊かな風味が和菓子を見事に引き立ててくれた。きっと素材の味を引き立てる役目ができるからこそ。料理やスイーツなど色々なものと合わせることが可能なのだと改めて感じたところである。

自主研修二日目は、実際に京都市内のカフェを訪問し、聞き取り調査を行った。今回は

カフェが比較的集中している中京区と下京区を中心にカフェを巡った。

はじめに、下京区にある KAEru coffee を訪問し朝食をいただいた。店員さんによると、お客さんは地元の方が多く、日本人の方はドリップコーヒーを頼むことが多いが、海外の方はラテやカプチーノを注文することが多いという。肝心の抹茶メニューは自家製スコーンの抹茶味のみであった。次の Café くるくるでは、抹茶ミルクが商品としてあったが、そんなに注文は多くないという話だった。二条城近くの CLANP COFFEE SARASA では地元の方が多く、抹茶マフィンがあったのだが、店長さんによると抹茶メニューが出るかどうかは日替わりで、レギュラーメニューではないとのことだった。また某店の店長さんからは、「京都だけどうちはコーヒー専門店なので抹茶のメニューは置いていない」と教えていただいた。コーヒーとお茶の味がぶつかるからとも仰っていた。もっと沢山のカフェを訪問したかったのだが、時間の問題や某ウイルスの影響等でお休みしていたカフェもあり、とても心残りなところである。

まとめとして、やはりカフェでは主にコーヒーを味わうことがメインとされており、抹茶メニューが取り入れられることはあっても、それはサブ的役割を担うのみに留まっているようである。京都だから抹茶メニューがよく売れる、というわけではないようだ。地元の人が通うカフェと、観光客の多いカフェを事前にリサーチして訪問すると、また違った比較ができたと思う。今回自分なりに選出したカフェは、地元の方が通うカフェに結果的に偏ってしまった。はっきりとした結論を出すためにはカフェの立地・客層等からも分析する必要があるが、今回の日本文化特別演習ではこのような傾向が分かったということを報告する。京都には町屋や銭湯を改装したカフェもあり、景観を守りつつ見事にカフェ文化が溶け込んでいる。京都以外でも地域ごとにカフェの個性があると考えているので、これからも大好きなカフェを通してさまざまな地域を巡っていく予定である。

写真：京都府宇治市 辻利兵衛本店にて季節の和菓子と水出し宇治茶
京都府下京区　KAEru coffee にて朝食

今を美しく生きる

2部日本文化学科　4年　2816114　後藤　久美子

日本文化学科で4年間学んできた集大成として、今回の日本文化特別演習に参加した。村中先生の「歩いて学ぶ人文学」の教えに従い、温故知新の精神でひたすら歩いてまわった。自分の足を使って歩くということは五感を使うことである。実際に自分の目で見て、聞いて、匂いを嗅いで、味わって、触れてもみた。歩くことにより見つけられるもの、気づくこと、感じることが沢山あり、歩いて学ぶということの大切さを実感した。

私の自主研修のテーマは「日本庭園でわび・さびの美意識を感じ取る」だったので、古都を代表する庭園を中心に巡った。最初に行ったのは、唯一のグループ研修で金閣寺である。金閣寺の正式名称は鹿苑寺で、室町幕府三代将軍足利義満により造られた。写真では何度も見ていたし、三島由紀夫の小説を読んで知っている気になっていたが、実際に見るのは初めてだった。想像以上にきらびやかで、その姿が池泉回遊式庭園の中にある鏡湖池に映る「逆さ金閣」は本当に美しかった。極楽浄土をこの世に現したと言われているが、誰もがその美しさに魅せられるだろうことは実感した。

自主研修1日目。まず京都御所へ行った。明治天皇が東京に移られるまでの約500年間天皇のお住まいとして使用された御所は、さすがに格式の高さを感じられた。池を中心とした回遊式庭園の御池庭と、庭石と灯籠を配した御内庭は、橋が架けられていて木々や花が風雅な美しさを見せていた。御所の敷地はとても広く、熱い甘酒で心と体を癒してから銀閣寺へ向かった。銀閣寺の正式名は東山慈照寺で室町幕府八代将軍足利義政により造られた。東山文化を伝える庭は上段が枯山水、下段が池泉庭園になっている。閑静な庭と渋いたたずまいの銀閣の姿は、奥深い精神文化を示している。このような美しさを「わび」と表すのかもしれないと感じることができた。静寂の中で黙々と苔の修復作業をしている人々がいた。地面に這いつくばるようにして一心に仕事をしていた。その姿を見て、長い歴史の中でこのような人々の力でこの美しい景観が保たれてきたことにあらためて気づき感動を覚えた。銀閣寺の近くの「おめん」といううどん屋さんで、つけうどんを食べた。だしがきいていて薬味が沢山盛り付けられていてとてもおいしかった。店員さんも親切に声をかけてくれお腹も心も幸せになった。その後、哲学者西田幾太郎のように思索に耽りながら「哲学の道」を歩いて南禅寺へ向かった。熊野若王子神社や永観堂にも寄りながら、南禅寺塔頭の金地院に到着。狩野探幽・尚信による襖絵と小堀遠州作の茶室は古いものの中に落ち着きと穏やかさを感じ、これがわび・さびの心に通じるのだろうと思った。鶴亀の庭として名高い小堀遠州作の枯山水庭園は、白砂が太陽の光で時折キラキラと光る様子は海の波を思わせた。その後南禅寺と南禅院でも庭園を見学したが、美しい庭園は歩き疲れた体にも元気を与えてくれる不思議な力を感じた。

2日目は京都駅からバスに乗り松尾大社に向かった。この研修中に何度もバスに乗ったが運転手さんがみな親切で優しい。案内も丁寧で、お年寄りが移動に時間がかかっても穏やかに待って

いてくれる。見ているほうの心も温まる光景だ。観光都市としてのおもてなしの心が京都人には自然に根付いている。酒造りの神様を祀る松尾大社は霊泉湧き出る古社である。昭和50年に重森三玲により造られた松風苑の三つの庭は「上古の庭」「曲水の庭」「蓬莱の庭」からなり、それぞれが表現豊かな芸術作品となっている。松尾大社から住宅街を歩いて鈴虫寺に行った。正式名は華厳寺であるが、一年中鈴虫が鳴いているので鈴虫寺と呼ばれている。茶菓子付きで僧侶の説法を聞くことができる。説法は人生に役立つ話も沢山あり、その中で特に心に残ったのは「今を美しく生きてください」という言葉であった。京都の歴史の中で今を考えることはとても大切なことだ。今があるのは、遠い昔から受け継いできた日々があっての今である。ずっと続いてきた文化や伝統を守ってきた人々によって今がある。今を美しく生きることは、これからの未来に美しくつなげていくためにも大切なことである。鈴虫寺の後に竹林がとても美しく、竹の寺とも呼ばれる地蔵院に行った。一休さんが幼少期を過ごした所で母子像がとても可愛らしく優しい。方丈庭園は十六羅漢の庭と呼ばれ、一つ一つの石は修業の姿を表しているという。苔と竹の参道を歩いていると歴史の中に身を置いている感謝の念がわいてきた。地蔵院から苔寺に行った。苔の庭が美しいので苔寺と呼ばれているが、正式名は西芳寺である。残念ながら冬期間は庭を公開していないので庭を見ることはできなかったが、木立に囲まれた参道に足を踏み入れると、奈良時代から脈々と受け継がれてきた歴史を感じ、厳かで身が引き締まるようだった。略式の座禅体験もでき、ひととき心を無にすることができた。西芳寺の後は、嵐山に向かい天龍寺に行った。天龍寺には夢窓疎石作の曹源池庭園がある。嵐山・亀山・小倉山を借景とした池泉回遊式庭園でとても美しい。折しも急に雨が降ってきて池に雨粒が落ちて跳ね返る様がより風情を増した。しかし、その後まだ雨が降っているのに太陽が出てきて驚いた。池に落ちて跳ね返る雨粒がキラキラと光り輝き、息をのむような美しい姿を見せてくれたのだ。写真も撮ってみたのだが、実際この目で見たようには撮れなかった。実際に体験することに勝るものはない。

3日目は「きぬかけの路」を歩き仁和寺・龍安寺・等持院を巡り、最後は二条城に行った。書きたいことが沢山あるのだが、紙面に制約があるため食べ物がらみで印象的だったことを記す。仁和寺の門を出たところに1本200円の桜団子を売る店があったので1本だけ頼んだにもかかわらず、可愛い桜型の皿に入れ、温かいお茶まで添えてくれたことが嬉しかった。龍安寺の中にある精進料理の店で湯豆腐を食べた。風情のある庭を見ながら湯豆腐をいただいていると、水の流れる音とともに時折「コーン」という鹿威しの音が聞こえてきて最高に贅沢な気分を味わえた。食事をおいしくするにも、おもてなしの心がなにより大切である。

近くの茶屋の桜団子

今回の研修では沢山の庭を見て回ったが、どこもとても美しく、京都の人々がずっと昔から大切に守り続けてきたものであることが、しっかりと心に届いた。わび・さびの美意識とは、それぞれの人が自分なりに感じる心の安らぎであり、心に語りかけてくる大切な思いととらえてもいいのではないかと結論づけ、研修を終えた。

京都の中で感じる「古」に触れる

2部日本文化学科　4年　2816126　能戸　麻紀

今回5泊6日にわたり関西へ研修旅行に出かけた。卒業研究を終え、リラックスした気持ちで学びを深めることができた。京都の中で感じる「古」に触れるというテーマのもと、旅程中の自主研修の3日間、京都のあらゆる寺社仏閣や名所を訪れた。

1日目、まずは京都御所に足を運んだ。日本語でのガイドがあるということで、説明を聞きながら回ることができた。まず歩いてみて、その大きさに圧倒された。長らく天皇の住まいであったということから、厳かな雰囲気が漂っていたが、当時の人々もあの大きさと雰囲気に圧倒され、天皇の権威というものを感じとっていたのではないだろうか。将軍が権力を握る時代となっても、大切に扱われてきたことが見てとれた。来客をもてなす美しい庭はなんとも優雅なものであった。見る人を癒してきたことだろう。蹴鞠をはじめとした遊びを楽しむスペースがあり、昔の人々の笑い声が聞こえてくるようであった。

その後、今宮神社へと移動した。ここには玉の輿に乗れるように、と願いをかけるために訪れたと言っても過言ではない。実際にそういったお守りも存在している。幼稚園が隣接しており、降園中の子供たちが神社で遊んでいる様子が印象的だった。美しく、広い境内を子供たちが駆け抜ける姿を見て、これが彼らにとっての日常であるのか、と不思議な感覚をおぼえた。昔の人々にとっても、それぐらいに身近な存在であったのだろうか、と考えさせられた。

今宮神社からしばらく歩いた所に建勲神社があった。ここには織田信長が祀られているとのことだった。随分と高い所に建てられていたが、それも織田信長の栄光を讃えてのことだったのだろうか。

バスでしばらく移動し、豊国神社へと訪れた。こちらは豊臣秀吉が祀られている神社であった。当初の予定にはなかったため、一時代を築いた人物の祀られている神社に続けざまに訪れることになるとは思ってもいなかった。京都駅からそう遠くない場所に位置しており、時代の変化とともに周辺はどのように変わっていったのか、どういう扱いを受けてきたのか深く調べてみたくなった。

2日目は宇治を訪れた。源氏物語ゆかりの地であるとのことで、一度は行ってみたい場所であった。京都市内とは違い、郊外の爽やかな雰囲気が印象的であった。

世界文化遺産に登録されている平等院鳳凰堂まで足を伸ばした。10円玉の裏側にデザインされていることから、ここも一度は訪れてみたいと思っていた。かの有名な藤原道長の別荘を利用して作られたということだが、当時の藤原氏の栄華を感じさせられるようであった。菩薩像をはじめとし、多くの国宝が収められており、自分のような庶民がこんな所に訪れてよいのだろうかと思うほどの華やかさであった。

その後、宇治川を渡り、源氏物語ミュージアムへと向かった。宇治川は想像以上に広く、

快晴で風もさほど吹いていないのに流れが早く見えた。同じ景色を紫式部も見ていたのだろうかと思うと感慨深かった。

源氏物語ミュージアムは、源氏物語のファンはもちろん、あまり内容をよく知らないという人でも楽しめる内容であったように思う。五感に訴えかけるあらゆる仕掛けにより、平安の世界に始まり、宇治十帖のストーリー展開を追うことができるようになっていた。5つの箱に入った香りを嗅ぎ、同じ香りのもの、違う香りのものを当てるゲームが想像以上に楽しかった。平安時代の人々も日常的にこのような遊びをしていたのだろうか。スマホゲームもいいが、こういった雅な遊びを日常に取り入れてみるのも良いのではないかと考えさせられた。

3日目、まずは伏見稲荷大社へと向かった。有名な千本鳥居には案の定圧倒された。今回は叶わなかったが、時間がもし許せば、いずれ稲荷山を制覇したいと思う。

その後、藤森神社、粟田神社、六波羅蜜寺、宝蔵寺へと足を運んだ。いずれの寺社仏閣もそれぞれ規模も雰囲気も異なっていた。今までこれほどまでに寺社仏閣を訪れたことがなかったため、こんなに違いがあるものなのかと驚かされた。特に、宝蔵寺の周辺は小規模のお寺が並んでいて、お寺の町、という雰囲気であった。

北海道で生まれ育ったこともあり、京都ほどの歴史を持った街に訪れたことがほとんどなかった。大都市でありながら、華やかな東京や大阪とは全く雰囲気が異なり、古の街の美しさを残し、古と共存することに徹底した作りがとても新鮮であった。これが京都の人々の日常の景色なのかと思うと、異国の地を訪れたような気持ちになった。

日本文化特別演習に参加して

2部日本文化学科　4年　2816140　中村　ちひろ

今回の日本文化特別演習では、2月24日から29日までの6日間にわたり、京都を訪れました。

研修を行うにあたって、個人テーマとして私の個人的な趣味でもある御朱印巡りを主軸に据えて、京都各所の寺社仏閣を回ることに決めました。

京都にはたくさんの有名なお寺や神社が数多くありますので、御朱印を集めながら各所を回るのはとても興味深く、有意義な体験でした。お寺や神社ごとに違いはそれぞれあるのは当然なのですが、同じ神社の同じ御朱印であっても、書いてくださる方によって字の書き方に強く個性が出るので、一緒に回ってくれた班のメンバーたちと見比べたり、やや不謹慎な楽しみ方ではありますが、「この方はどんな字を書かれるのだろう？」とこっそり予想したりしながら、書いていただくのを待っている時間が楽しみでもありました。

また、偶然にも滞在中の日程と、刀剣にゆかりのある建勲神社、藤森神社、粟田神社、豊国神社の4か所で特別な御朱印を授与していただくことができる「京都刀剣御朱印めぐり」の実施期間が一致し、そちらの御朱印も無事にいただいてくる機会に恵まれたことも私にとって僥倖でした。

そのほかにも、宇治の平等院鳳凰堂や、六波羅蜜寺の「空也上人立像」など、教科書や文献の写真でしか見たことのない数々の文化財を実際にこの目におさめることができたことも非常に貴重な機会であったと感じています。平等院鳳凰堂は本当に「美しい」という言葉以外に形容できないほどの壮麗さを備えた場所でした。間近で見た鳳凰堂と、堂内の様子（現在は修復作業中だということではありましたが）はあまりに人智を超えているようにも感じられ、「本当にこれらをすべて手作業で造ったのだろうか」と思ってしまうほど圧倒されました。「空也上人立像」をはじめ、展示されている仏像はどれも袈裟の皺や、数珠を握る指先一つに至るまで、ディティールの細かさが素晴らしく、宝物殿の中でしばし見とれてしまいました。

宇治では「源氏物語ミュージアム」にも足を運びましたが、源氏物語について詳しくない素人の私でも物語に親しむことができる展示物が多く、楽しみながら見て回りました。中でも、香道の一つである「源氏香」を実際に体験するコーナーは大変興味深く、班員同士で盛り上がりながら楽しむことができ、とてもよかったです。他の展示物や、オリジナルのアニメーション作品など、事前知識がなくても楽しめるような工夫がされているので、「源氏物語には詳しくないから……」と敬遠せずに、気軽に足を運んでみていただきたいです。私も予備知識のない状態で他のメンバーに付き添って入りましたが、館内を見終わる頃には一度源氏物語を読んでみようという気持ちになっていました。

宇治川も道中橋を渡って見物してきましたが、想像以上の規模と勢いに思わず戦慄して

しまいました。橋の上から川の流れるごうごうという音が聞こえ、上から覗き見る川の流れも存外速く、正直に申し上げると恐怖を感じるほどでした。ですが、橋の上から眺める景色は美しく、冬の寒ささえなければゆっくりと眺めていたいと感じるほどでした。

私はこの研修での訪問が初めての京都でしたが、浅薄な言い方になってしまいますが「歴史を感じる街」であることを再認識しました。村中先生引率の団体研修での散策でも感じたことですが、ただ街を歩いているだけでも石碑があったり有名な逸話があったりと、どこを掘っても歴史につながるのだなあと強く思いました。また、名のある建造物のみならず、住宅街の一角にひっそりとあるような石碑などの歴史の残滓も、他所から来た私たちにとっては物珍しく、観光の一部となるものですが、現地に住まわれている方々にとっては「なんてことはない日常の一部」であるのだという当たり前の差を改めて実感し、感慨深く思っておりました。これは京都に限った話ではないと思いますが、しかしやはり日本の歴史に鑑みたとき、京都という街が担ってきた役割や影響は大きく、他の街とは一線を画すものがあるのではないかと感じました。古い街並みを、確かにここにはかつて都があったのだと思いを馳せながら歩いてみるというのは、普段なら恐らく絶対にできない体験ですし、趣があって大変素敵な経験ができたと思います。当初の目的であった御朱印もたくさんいただくことができましたし、実に実りのある５日間を過ごせました。

今回だけでも十分に見どころ満載の旅でしたが、今回の滞在では残念ながら回りきれなかったところも少なくありませんでしたので、次に個人的な機会があればぜひまた京都の街を探索したいと思います。

この度は、貴重な機会をありがとうございました。

写真左：平等院鳳凰堂。当日は天気がよく、スマホのカメラが高性能だったこともあり綺麗に撮影することができた。

写真右：先述の「京都刀剣御朱印めぐり」にて授与して頂ける御朱印たち。幸い、四か所すべて回ることができた。記念品のクリップ付き。

神様と歩く京都

2 部英米文化学科　4 年　3016145　門間　未来

歴史的建造物が多数存在する京都において、「神社」は最も重要な建造物のひとつである。自分は今まで数度京都を訪れており、清水寺や金閣寺、二条城などの観光スポットとしても有名な場所は歩いたことがあったが、今までは神社にあまり興味を向けることがなく、ほとんど行ったことがなかった。そのため今回の日本文化特別演習では京都を訪問するにあたり、ご朱印を集めつつ京都に数多く存在する「神社」や祀られている神様に焦点を当てて見学した。その中でも特に印象が強かった場所が、建勲神社、伏見稲荷大社、北野天満宮である。本稿では参拝した神社 10 箇所の内、上記 3 箇所について報告する。

まず、建勲神社（たけいさおじんじゃ）[i]だが、明治 2 年（1869）に明治天皇の命により創建された比較的に新しい神社である。お祀りしているのは織田信長で、船岡山山麓にあった社殿は現在山頂に遷されている。参拝するルートは主に二つあり、麓にある鳥居から入り、長い階段を上っていくルートと、北側にある坂道を山の外周に沿って登っていくルートである。自分は建勲神社の前に今宮神社に参拝していたため、北側にある坂道から上った。船岡山は京都市内にして緑豊かな山で、都会の喧騒を一時忘れる静かな神社だった。建勲神社のご朱印は通常のご朱印同様に社名を書いてもらえるものの他に、織田信長の「敦盛」の一説を書いた見開き程度の大きなものや、当日は刀剣乱舞というゲームとコラボし「宗三左文字」や「薬研藤四郎」などの織田信長ゆかりの刀の名前が書かれたご朱印もあった。このような現代の若者にも受け入れやすいモチーフを積極的に取り入れる姿勢は新しい物好きといわれた織田信長を祀る神社らしい点なのかもしれない。

北野天満宮のご祭神は菅原道真公である。菅原道真公は幼少期より学業に励み和歌を読む等優れた才能の持ち主であり、若くして出世をしたが藤原氏の策謀により九州へ左遷され無念の死を遂げた。そのため、主なご神徳は学問の神、冤罪を晴らす、正直・至誠の神といわれている。また、菅原道真公は梅の花をとても愛し、左遷された九州の地においても遠く故郷の梅の花を思い和歌を詠んだことから、境内には梅の木が多数植えてある。境内の梅の木は 1500 本、50 種類あり毎年 2 月上旬から 3 月中まで開苑される梅苑には多くの人が訪れる。訪問当日の 2 月 25 日は菅原道真公の祥月命日であり「梅花祭」が行われており、多くの人でにぎわっていた。特に人々が目を奪われていたのはご神木の「紅和魂梅」であった。本殿の目の前に植えられたご神木の梅花の色はひときわ濃く、厳かな雰囲気であった。今回は「梅花祭」であったが、毎月の命日も「天神さん」と呼ばれる御縁日が開

かれているので、興味のある方はぜひ足を運んで欲しい。

全国に 3 万社あり、日本人にもっとも身近であるといわれる稲荷神社の総本宮が伏見稲荷大社[ii]である。西暦 711 年に創建され、お祀りしている神様は「うかのみたまのおおかみ」「さたひこのおおかみ」「おおみやのめのおおかみ」「たなかのおおかみ」「しのおおかみ」の五柱である。イナリとはイネナリやイネニナルがつづまったもので、稲荷神社はその名の通り衣食住の内でも特に食に関するご利益があるといわれている。また、自分は稲荷神社の主神は狐の姿をしているものと思っていたが、狐は神の眷属であるとのことだった。伏見稲荷大社はご朱印をもらえる場所が三箇所あり、一つ目は入ってすぐの本殿、二つ目は千本鳥居後の奥社、三つ目は御膳谷でもらうことができる。当日は他にも見学する予定があったため二つ目までしか回ることができなかったが、参拝客が少なかったこともあり、たくさんの鳥居に吸い込まれるような感覚を覚えながらゆっくり稲荷山を散策するという貴重な体験ができた。

今回は個人研修の 3 日間と前日午後の自由行動で 10 箇所の神社と 2 箇所の寺院を回ることができた。今までは神社の中を真面目に見て回ることはなかったが、今回の研修で神社一つ一つに大きく違いがあることがわかった。社の立て方やご朱印、いわれはもちろん異なるが、神社によっては参拝時の作法も異なる場合もあり、非常に興味深く感じた。そのため今後は北海道の神社や他の地方の神社にも訪問し、日本古来の文化である神社や神様についても学びを深めて行きたい。

参考文献

「北野天満宮について」北野天満宮
（ http://kitanotenmangu.or.jp/sp/about_history.php ）2020 年 3 月 3 日参照
「京都建勲神社」建勲神社（http://kenkun-jinja.org/）2020 年 3 月 2 日参照
「伏見稲荷大社とは」伏見稲荷大社（ http://inari.jp/about/）2020 年 3 月 2 日参照

---

[i] 建勲神社：右写真は境内の中腹辺りからみた拝殿の様子。

[ii] 伏見稲荷大社：右写真二枚目は伏見稲荷大社から奥社へと続く千本鳥居である。

令和元年度 日本文化特別演習報告書 第9号

発行日　令和2年3月20日
発　行　北海学園大学人文学部
印　刷　株式会社アイワード

文化を学ぶ 世界と繋がる

北海学園大学人文学部